多賀城市文化財調査報告書第11集

高崎遺跡

―都市計画街路高崎大代線外１線
建設工事関連発掘調査報告書Ⅰ―

昭和61年3月

多賀城市教育委員会
多賀城市都市計画課

高　崎　遺　跡

―都市計画街路高崎大代線外１線
建設工事関連発掘調査報告書Ⅰ―

巻頭図版　調査区及び周辺地域航空写真（西より）

序

本市は、奈良・平安時代に東北地方の政治、経済、文化の中心地として栄えた「多賀城」を有し、〝文化をはぐくむうるおいのあるまち〟づくりを目ざして努力しています。特別史跡多賀城跡は、毎年整備、復元が行なわれ、四季おりおりに美しく姿を変化させ、見るものの目を楽しませるとともに、市民のいこいの場ともなっています。このように、史跡のまちとして内外に誇れることができますのも、ひとえに市民の皆さんの文化財行政に対する御理解と、史跡を愛する地元の方々の御協力のたまものと思っております。

さて、今回の高崎遺跡の調査は、都市計画街路の建設に伴なう事前調査として、市都市計画課から調査依頼を受けて実施したものです。調査は２ケ年計画の予定であり、今年度はその１年目として、対象地域の東半部を発掘調査し、これと合わせて西半部の遺構の所在確認も行ないました。調査の結果、平安時代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡、溝跡などが発見され、多賀城跡周辺地域を調査、研究するうえで、貴重な成果をあげることができました。

ここに、調査の成果を報告するにあたり、調査に御協力下さった関係各位に対して感謝を申し上げますとともに、本書が学校教育や社会教育などの場において、多賀城市の歴史を考える資料の１つとして活用されますれば幸いに存じます。

昭和61年３月

多賀城市教育委員会

教育長　玉　蟲　　誼

例　　言

1、本書は、都市計画街路（高崎大代線外１線）建設工事に伴ない実施した「高崎遺跡発掘調査」の結果をまとめたものである。

2、調査区は、「高崎遺跡」に包蔵されている多賀城市高崎字井戸尻（高崎二丁目）に位置し、「ＴＳ－ＩＺ」の略号を用いて記録している。

3、本文の執筆は、文化財保護係職員が分担して行ない、編集は、石本　敬、千葉孝弥、相沢清利が担当した。

4、本書の作成にあたっては、次の者が携わった。

　　滝口裕子、我妻悦子、柏倉霜代、須恵美智子、熊谷純子、黒田啓子

5、調査及び遺物の整理においては、下記の方々に御助言、御協力を賜った。

　　岡村道雄、佐藤和彦（東北歴史資料館）、進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、丹羽　茂、後藤秀一（宮城県多賀城跡調査研究所）、鎌田俊昭（多賀城市文化財保護委員）、及川　格（仙台市教育委員会）、柳沢和明、須田良平（東北大学）

6、調査区の実測基準線は、国家座標の方向をとっている。

7、本書中の土層の色調については、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）を使用した。

8、調査、整理に関する諸記録及び出土遺物は、多賀城市教育委員会が一括保存している。

調　査　要　項

1、遺跡所在地：宮城県多賀城市高崎２丁目47－２～94－３

2、調 査 期 間：昭和60年９月９日～11月30日

3、調 査 面 積：800㎡（対象面積6,400㎡）

4、調査主体者：多賀城市教育委員会　教育長　玉蟲　誼

5、調 査 担 当：多賀城市教育委員会　社会教育課文化財保護係

社会教育課長	柳原邦男	主　事	柏原靖史
文化財保護係長	高倉敏明	嘱　託	千葉孝弥、相沢清利
技　師	滝口　卓、石川俊英、石本　敬		

6、調査協力者：多賀城市都市計画課、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所

7、調査参加者：赤間かつ子、阿部敏子、阿部トシ子、阿部美智子、阿部美津子、阿部米子、猪俣敏子、遠藤一代、小野玉乃、加藤文一、熊谷きみ江、熊谷好子、黒崎庸治、後藤はつみ、桜井三千夫、桜井栄子、佐々木四郎、佐藤たま子、佐藤節子、下道博信、鈴木劭、菅原絹代、高野敏子、千葉享一、角田静子、鶴巻まき子、早坂ゑみ子、渡辺園恵、渡辺ゆき子、本田ノブ子

本　文　目　次

序　文

例　言

調査要項

Ⅰ．遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1

Ⅱ．調査に至る経緯 …… 1

Ⅲ．調査方法と経過 …… 5

Ⅳ．調査成果 …… 6

1．A地区

〈地形と基本層位〉 …… 6

〈発見遺構と遺物〉 …… 7

(1) 掘立柱建物跡 …… 8

(2) 柱列跡 …… 9

(3) 竪穴住居跡 …… 9

(4) 溝跡 …… 12

(5) 土坑 …… 17

〈堆積層出土の遺物〉 …… 19

2．B地区

〈地形と基本層位〉 …… 21

〈発見遺構と遺物〉 …… 21

3．C地区

〈地形と基本層位〉 …… 22

〈発見遺構と遺物〉 …… 22

Ⅴ．まとめ …… 24

挿図・図版目次

第１図　遺跡分布図 …… 2
第２図　調査区位置図 …… 3･4
第３図　Ａ地区東側　遺構配置図(1) …… 6
第４図　Ａ地区東側　遺構配置図(2) …… 7
第５図　ＳＢ01実測図 …… 8
第６図　ＳＩ01出土遺物 …… 9
第７図　ＳＩ01実測図 …… 10
第８図　ＳＩ02実測図 …… 11
第９図　Ａ地区西側　遺構配置図 …… 13
第10図　ＳＤ02・03・04セクション図 … 14
第11図　ＳＤ05～08・10・12・14
セクション図 … 15
第12図　溝跡出土遺物 …… 16
第13図　出土遺物(瓦) …… 17
第14図　ＳＫ03・04セクション図 …… 18
第15図　土坑出土遺物 …… 19
第16図　堆積土出土遺物 …… 20
第17図　Ｂ地区各グリット実測図 …… 21
第18図　ＳＫ01出土遺物 …… 22
第19図　Ｃ地区遺構配置図 …… 23
第20図　Ｃ地区出土遺物 …… 24
巻頭図版　調査区及び周辺地域航空写真
図版１　調査区遠景 …… 26
図版２　Ａ地区ＳＤ02・10溝跡 …… 26
図版３　Ａ地区ＳＤ02・10溝跡 …… 26
図版４　Ａ地区ＳＤ03・05～08溝跡 …… 26
図版５　Ａ地区ＳＩ01・ＳＢ01・ＳＡ01 … 26
図版６　Ａ地区ＳＩ01・ＳＢ01・ＳＡ01 … 26
図版７　Ａ地区ＳＩ01竪穴住居跡 …… 26
図版８　Ａ地区ＳＩ02竪穴住居跡 …… 26
図版９　Ａ地区ＳＫ06土坑 …… 27
図版10　Ａ地区ＳＢ01建物跡
柱穴半截状況 …… 27
図版11　Ａ地区ＳＤ04溝跡 …… 27
図版12　Ａ地区ＳＤ14溝跡、ＳＫ03土坑 … 27
図版13　Ｂ地区Aq・Ar-40グリット …… 27
図版14　Ｂ地区Aq・Ar-36グリット …… 27
図版15　Ｂ地区ＳＫ01土坑 …… 27
図版16　Ｃ地区ＳＩ01・02検出状況 …… 27
図版17　出土遺物 …… 28
図版18　出土遺物 …… 29

Ⅰ　遺跡の地理的・歴史的環境

高崎遺跡は、多賀城市のほぼ中央に位置し、留ケ谷、高崎地区を中心とする東西約1.2km、南北約1kmにわたる広範囲な遺跡である。本市は近年仙台市の近郊都市としての発達が著しく、遺跡の大半は既に開発され宅地化されている。

本遺跡の地理的な環境についてみると、松島丘陵から派生した標高50～100mの丘陵は、塩釜、利府方面から南西方向に大きく張り出し、その周辺にとりついて低丘陵が延びてきている。本遺跡は、このような標高20～50mの低丘陵の南端に位置している。この付近の低丘陵は、大きくV字状に開く谷をつつむ形をなし、いずれも溺れ谷地形を示しており、大小の谷間が複雑に入り込んでいる。今回の調査地点は、丘陵北側斜面と平坦部で、沖積地との比高差は2～4mである。

この低丘陵上には、旧石器時代、古墳時代～近世までの遺跡が分布している。旧石器時代の遺跡としては志引遺跡があり、古墳時代では本調査区の北側に隣接する丸山囲古墳群と東北学院大学工学部の敷地内に所在する稲荷殿古墳がある。奈良・平安時代の遺跡としては、本遺跡に取り囲まれるような形で多賀城廃寺跡があり、さらに北西約1.2kmには、陵奥国府として栄えた多賀城跡が所在している。中世の館跡とみられている遺跡としては、東田中窪前遺跡、志引遺跡、桜井館跡があり、いずれも丘陵南端部に位置している。また、この付近一帯は、数多くの板碑が所在するところとしても知られている。一方、本遺跡の西側一帯に広がる沖積地には、市川橋、山王、新田の各遺跡が分布している。

次に、これまでに実施された本遺跡における発掘調査についてみると、昭和41年に行なわれた丸山囲古墳群南方の調査では、古代の建物跡や井戸跡等が発見されている（註1）。昭和55年には、本調査区北側の丘陵西側斜面部を調査し、平安時代の掘立柱建物跡、合口甕棺を検出している（註2）。また、昭和60年の留ケ谷地区の調査では、近世の土墨とそれに伴なう溝跡を検出している。なお、本調査区南方の今村邸からは、昭和47年に土師器と須恵系土器の杯が重なった状態で発見され、およそ640個体の土器が出土している（註3）。

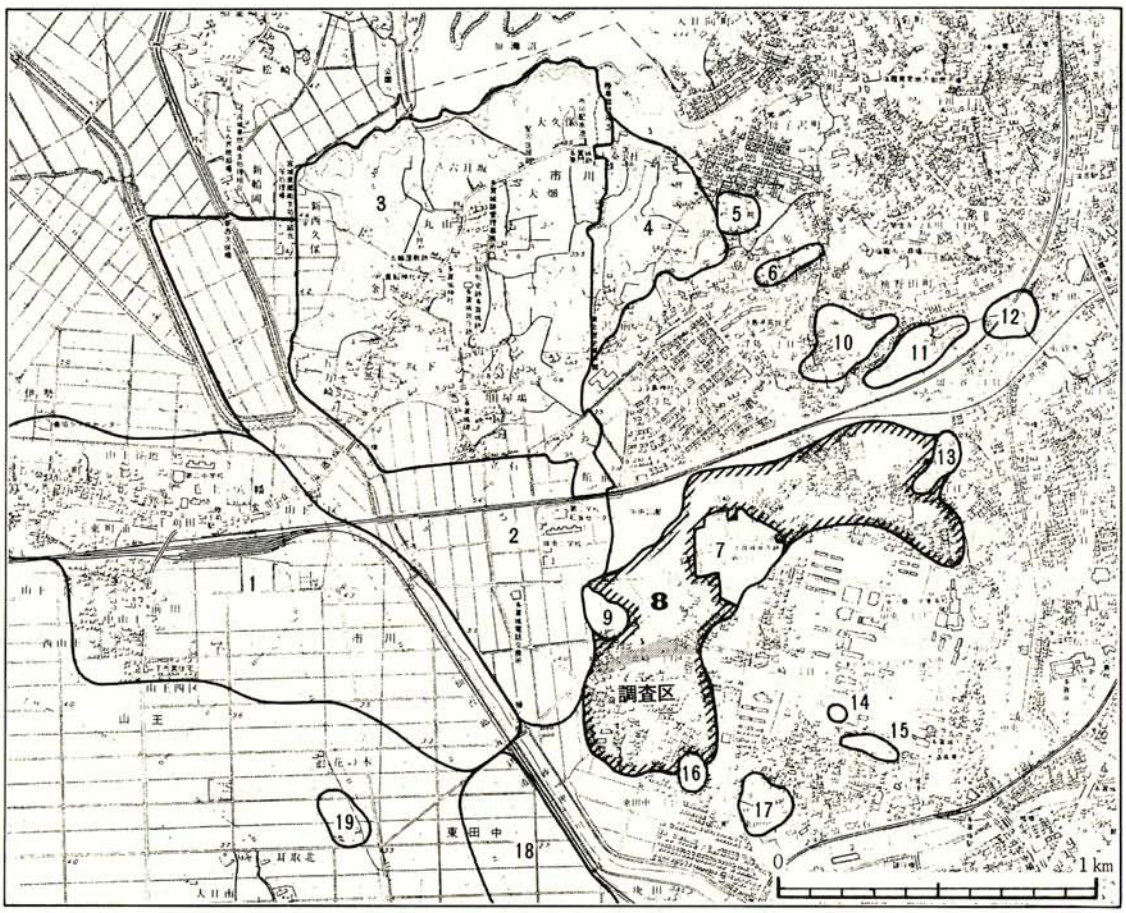
Ⅱ　調査に至る経緯

都市計画街路高崎大代線は、多賀城市高崎字井戸尻（高崎二丁目）を起点とし、鶴ケ谷字舟塚（丸山一丁目）を終点とする延長約2,300m、幅員16mで計画され、昭和41年3月3日に決定されている。本計画街路の事業着手は昭和49年度に始まり、路線の一部は既に改良工事が行なわれていた。

本計画街路は、高崎遺跡が所在する多賀城廃寺跡南西部の丘陵北側裾部を通過するため、早

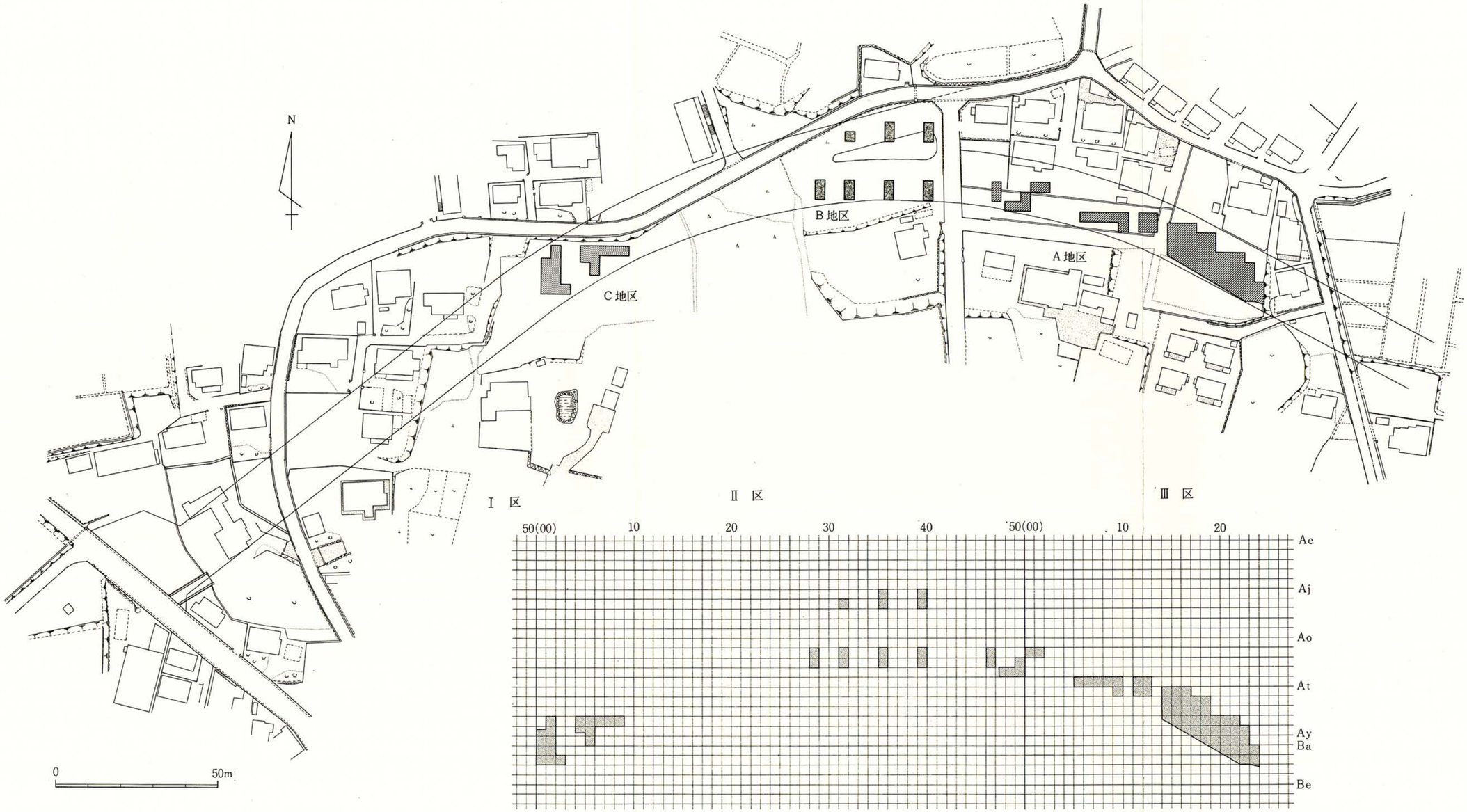
くから都市計画課と事前協議を行なってきた。街路工事は、昭和58年度以降に急速に進むことが予想されたため、工事に先行して昭和60年度から発掘調査に着手する計画で遺跡内の路線の検討を行なった。現地踏査等の結果、丘陵部の一部は住宅建築等のため既に削平されていたが、丘陵東側部分は平坦部分を有し、西側は丘陵緩斜面と僅かな平坦面をもつことから、遺構が存在する可能性が考えられた。

以上のことから、発掘調査は遺跡内延長400 m を対象とし、初年度は東側平坦部分の調査と遺構の所在確認に主眼を置いた調査を行ない、本格的な調査は次年度以降に実施することを都市計画課と確認した。



遺跡番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	山王遺跡	集落跡	古墳～近世	11	野田館跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
2	市川橋遺跡	集落跡・水田跡	奈良・平安	12	矢作ケ館跡	〃	〃
3	特別史跡多賀城跡	国府跡	奈良・平安・中世	13	留ケ谷館跡	〃	奈良・平安・近世
4	西沢遺跡	散布地	奈良・平安	14	稲荷殿古墳	高塚古墳（円）	古墳（後）
5	法性院遺跡	〃	〃	15	桜井館跡	館跡	中世
6	高原遺跡	〃	〃	16	東田中窪前遺跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
7	特別史跡多賀城廃寺跡	寺院跡	〃	17	志引遺跡	包含地・館跡	旧石器 奈良～中世
8	高崎遺跡	集落跡・館跡	奈良・平安・中世	18	六貫田遺跡	散布地	奈良・平安
9	丸山囲古墳群	高塚古墳（円）	古墳	19	大日北遺跡	〃	〃
10	小沢原遺跡	散布地	奈良・平安				

第1図　遺跡分布図



（グリット配置図）

第2図　調査区位置図

Ⅲ　調査方法と経過

発掘調査は、都市計画街路の路線敷にかかる約6,400㎡を対象として実施した。路線は東西方向に延び、緩やかに南側へカーブするため、国家座標のX：-189,500.000mを基準線とし、北側のY：14,200.000～14,350.000mをⅠ区、Y：14,350.000～14,500.000mをⅡ区、Y：14,500.000mより東側をⅢ区とし、X：-189,500.000mの南側Y：14,200.000～14,350.000mをⅣ区とした。さらに各区を一辺3mのグリットで区画し、南北方向をアルファベット（Aa、Ab、Ac…Ay、Ba…Bw、Bx、By）、東西方向を東側からアラビア数字（01、02、03…48、49、50）で表わした。

なお、調査にあたっては、その目的に遺構の所存確認という性格も含むことから、調査対象地域に任意にトレンチを設定した。そのため調査の便宜上、掘り込み箇所に東側からA地区、B地区、C地区と3つの地区名をつけた。これらは、調査区のほぼ中央部を南北方向に走る市道（Ⅱ区42ライン）を境として、その東側の平坦部と緩斜面をA地区、西側の平坦部をB地区とし、さらにその西側の丘陵部をC地区とした。以下の記述には、この地区名を使用することにする。

調査は、昭和60年9月9日より開始し、まず各地区の基準点の設置を行なう。また、A地区に移転した家屋の基礎が残っていたため、バックホーで撤去作業を行なう。その後、調査対象地域の遺構の分布状況を確認するため、各地区にトレンチを設定し、B地区より調査を開始する（9月19日）。B地区においては、丘陵の裾部付近より溝跡、土坑等を検出する。10月4日よりA地区の調査を開始し、表土剝離、遺構検出作業を行ない、溝跡、土坑等を検出する。10月14日よりC地区の遺構確認調査を開始する。B地区においては、写真撮影及びセクション図作成、平面図作成を行ない調査を終了する。C地区においては、竪穴住居跡、土坑等を検出し、写真撮影及びセクション図作成、平面図作成を行なう。実測図終了後、遺構の重複関係について再度検討を行ない調査を終了する（11月5日）。A地区においては、検出した遺構の掘り込み調査を行ない、中央部に残した東西ベルトのセクション図作成を行なう。遺構の調査が終了した後、全景写真を撮影し、平面図作成を行なう（11月9日）。東側傾斜面において、最終遺構面の調査を行ない、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、柱列跡を検出し、掘り込み調査を行なう（11月15日）。これらの写真撮影及び平面図作成を行ない、すべての調査を終了する（11月30日）。

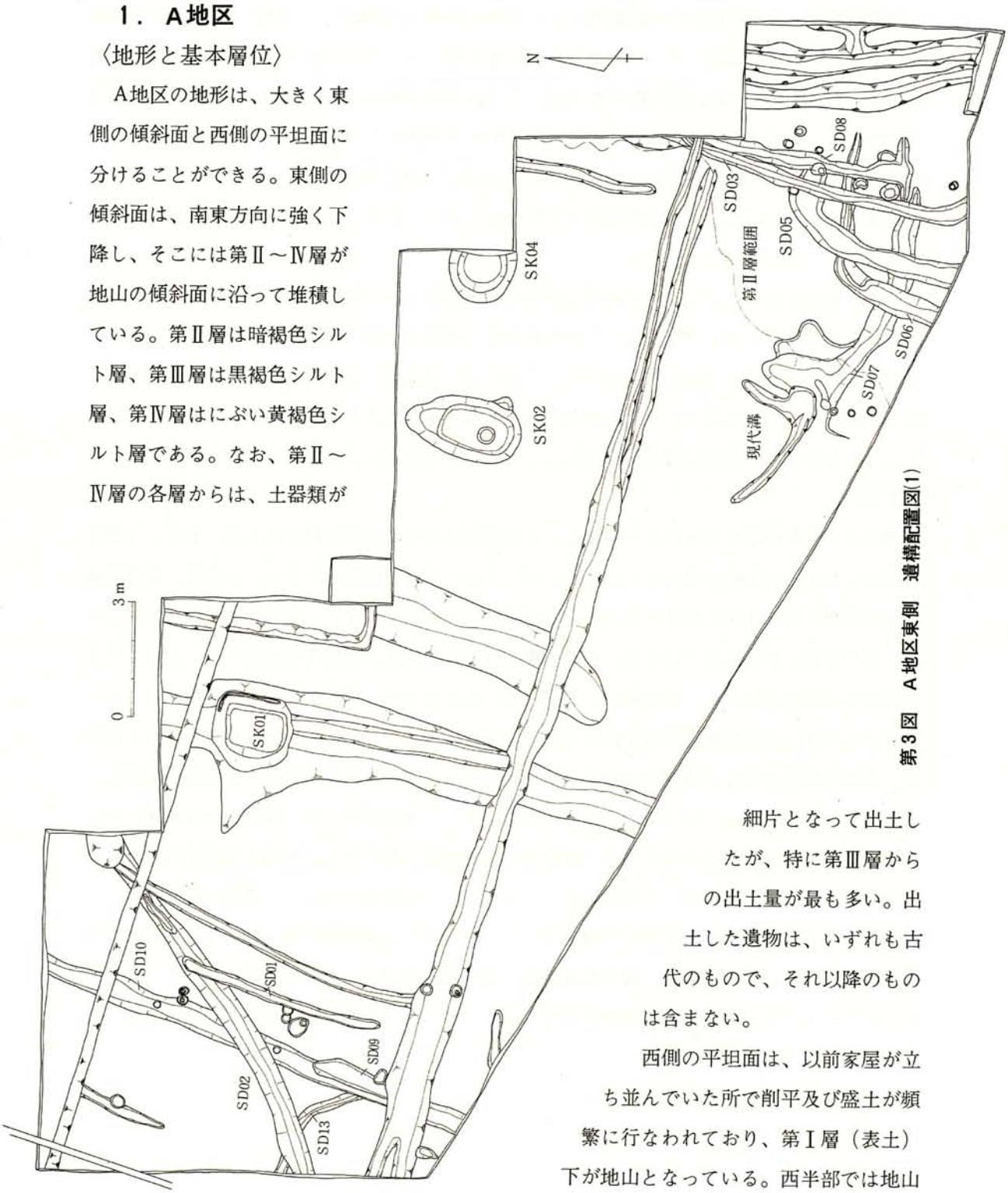
Ⅳ 調 査 成 果

1．A地区

〈地形と基本層位〉

A地区の地形は、大きく東側の傾斜面と西側の平坦面に分けることができる。東側の傾斜面は、南東方向に強く下降し、そこには第Ⅱ～Ⅳ層が地山の傾斜面に沿って堆積している。第Ⅱ層は暗褐色シルト層、第Ⅲ層は黒褐色シルト層、第Ⅳ層はにぶい黄褐色シルト層である。なお、第Ⅱ～Ⅳ層の各層からは、土器類が細片となって出土したが、特に第Ⅲ層からの出土量が最も多い。出土した遺物は、いずれも古代のもので、それ以降のものは含まない。

西側の平坦面は、以前家屋が立ち並んでいた所で削平及び盛土が頻繁に行なわれており、第Ⅰ層（表土）下が地山となっている。西半部では地山

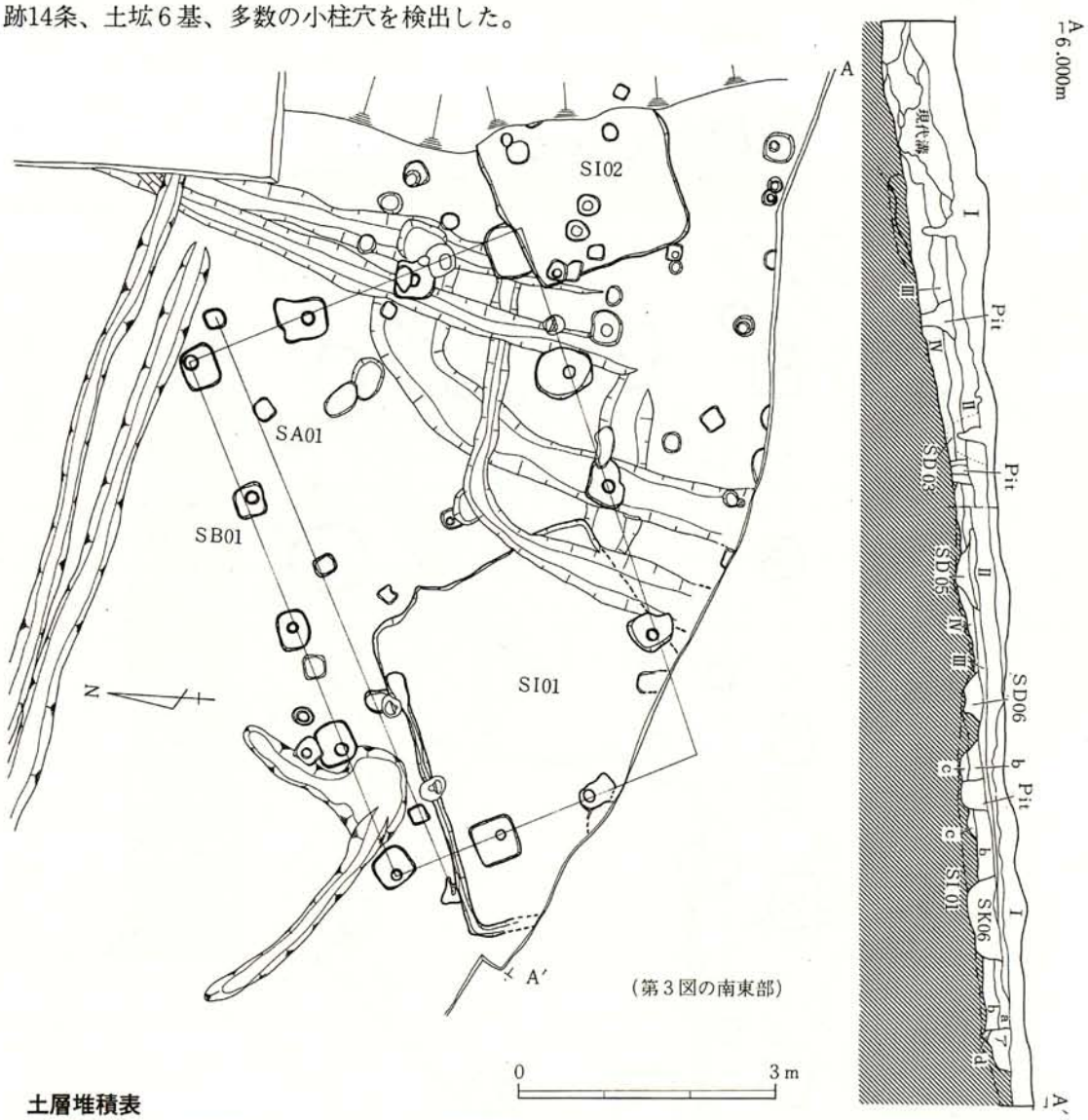


第3図　A地区東側　遺構配置図(1)

の落ちが認められ、それは沖積地へと移行している。また、B地区との境付近では、一部で岩盤が露出しており、起伏のある複雑な地形をものがたっている。

〈発見遺構と遺物〉

調査区の東側傾斜面と西側平坦面で、掘立柱建物跡１棟、柱列跡１条、竪穴住居跡１軒、溝跡14条、土坑６基、多数の小柱穴を検出した。



土層堆積表

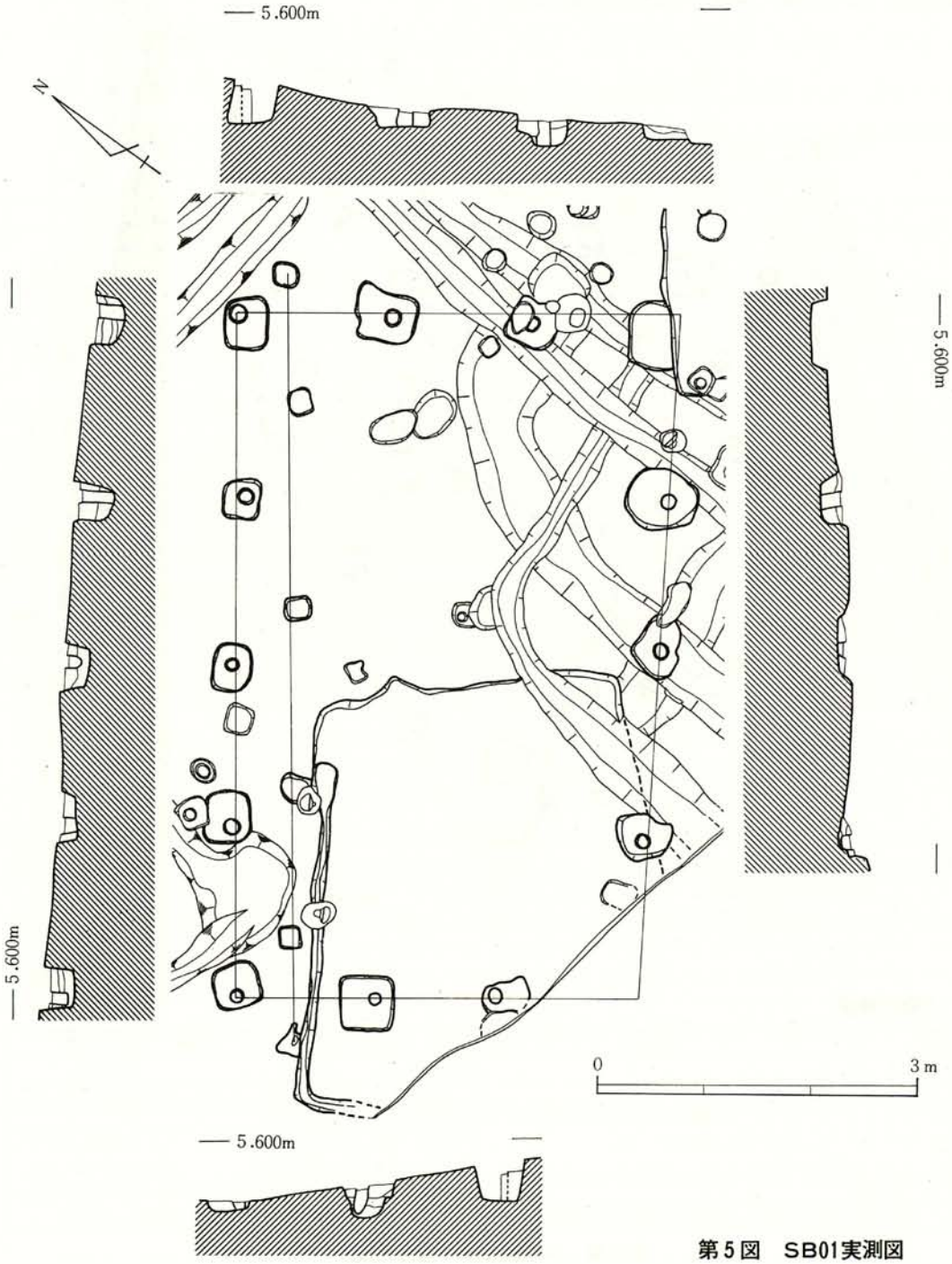
層位	土色	備考
堆積土		
Ⅰ	暗褐色(10YR3/3)	表土
Ⅱ	〃	黒褐色土(10YR3/3)が混じる。
Ⅲ	黒褐色(10YR3/3)	遺物を多く含む。
Ⅳ	にぶい黄褐色(10YR5/3)	硬くしまりあり、マンガンを含む。
ア 遺構		
	浅黄色(5Y7/3)	混じりけのない地山に近い土が主体。

層位	土色	備考
SK06		
	灰黄褐色(10YR6/2)	マンガンと地山粒を多量に含む。
SI01		
a	灰黄色(2.5Y6/2)	貼り床　マンガンと地山塊を多量に含む。
b	にぶい黄橙色(10YR7/2)	〃　上層より粒子が細く均質。
c	灰白色(2.5GY8/1)	〃　d層より粒子が粗く砂が混じる。
d	灰白色(10YR7/1)	周溝　地山ブロックを含む。

第４図　A地区東側　遺構配置図(2)

(1) 掘立柱建物跡

ＳＢ01掘立柱建物跡　東側傾斜面の地山上で検出した南北３間、東西４間の東西棟掘立柱建物跡である。柱穴は、調査区外へ延びる南西隅のものを除いてすべて検出しており、柱痕跡も確認している。ＳＩ01・02住居跡と重複しており、それらより古い。本建物跡の方向は、北側



第５図　ＳＢ01実測図

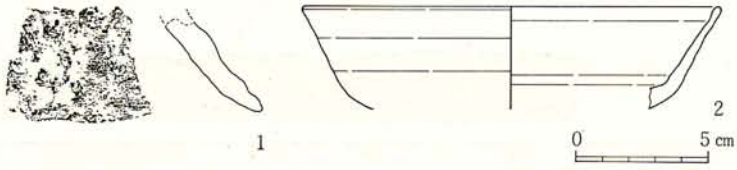
柱列でみると東で36度20分北に偏している。次に柱間についてみると、桁行は北側柱列が西より1.58m・1.51m・1.58m・1.72mで総長6.38m、南側柱列が西より（1間分不明）・1.79m・1.39m・（1間分不明）で総長については不明である。一方、梁行は東妻が北より1.45m・1.29m・（1間分不明）、西妻が北より1.30m・1.13m・（1間分不明）で総長についてはいずれも不明であるが、東妻でみると約4.0mと推定される。各柱穴は、基盤の傾斜に沿って東側のものほど深くなっており、北西隅の柱穴と南東隅の柱穴の底面の比高差は約0.8mである。柱穴平面形は、大部分が方形を呈し、50cm四方のものから33cm×37cmのものまである。壁は、ほぼ垂直に掘り込んだものが多いが、段掘りしているものもある。掘り方埋土は、地山粒を多く含んだ灰黄褐色シルトやにぶい黄橙色シルトであり、互層に埋めているものもある。柱は、柱痕跡より径10～15cmと推定できる。遺物は、柱痕跡埋土や掘り方埋土より土師器甕の小片が若干出土している。

(2) 柱　列　跡

ＳＡ01柱列跡　東側傾斜面の地山上で検出した東西５間の柱列跡である。ＳＢ01建物跡の北側柱列の南側にあり、これと方向をほぼ同じにしている。ＳＩ01住居跡と重複し、これより古い。また、ＳＢ01建物跡とも重複しているが、相互の柱穴に直接の切り合いがないため、新旧関係は不明である。柱痕跡は確認できなかったので、その中心で柱間をみると、西より約1.0m・約1.4m・約1.7m・約1.9m・約1.2mで総長は約7.1mである。埋土はＳＢ01建物跡のそれと非常に近似している。

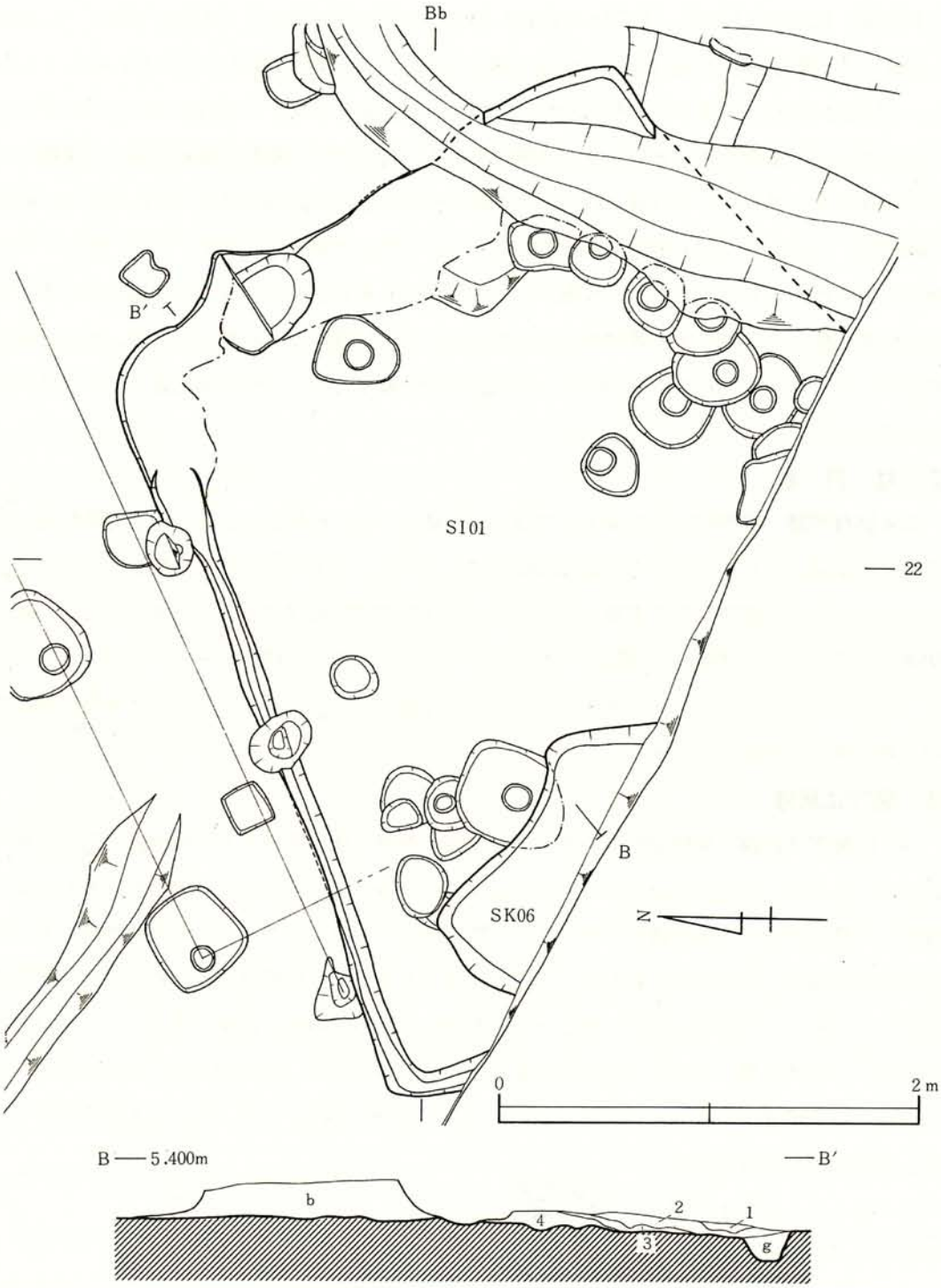
(3) 竪穴住居跡

ＳＩ01竪穴住居跡　東側傾斜面の地山上で検出した竪穴住居跡である。南西隅が調査区外へ延びているため、全体を検出してはいない。後世の溝等によって大きく破壊されており、また検出した時点で既に床面が露出していたなど残存状況は良好ではない。ＳＢ01建物跡、ＳＡ01柱列跡と重複し、これらより新しい。平面形は長方形を呈し、規模は北辺が約3.8m、東辺が約2.9mである。方向は、北辺で計ると東で23度北に偏している。構築に際しては、基盤の傾斜に沿って全体を掘り下げ、その後床を貼っている。貼り床は、地山粒を多く含む灰黄色シルトやにぶい黄橙色シルトで全体に及んでいる。厚さは18～25cmである。このうち北東隅から東辺、南辺の壁際には、焼土や炭化物を多く含む土が使われている。床面は削平されているため明確ではない



No.	種　別	器形	遺　構	外面調整	内面調整	口　径	底径	器高	備　考
1	土製支脚		ＳＩ01						
2	須恵器	杯	ＳＩ01	ロクロナデ	ロクロナデ	(16.8)			

第６図　ＳＩ01出土遺物

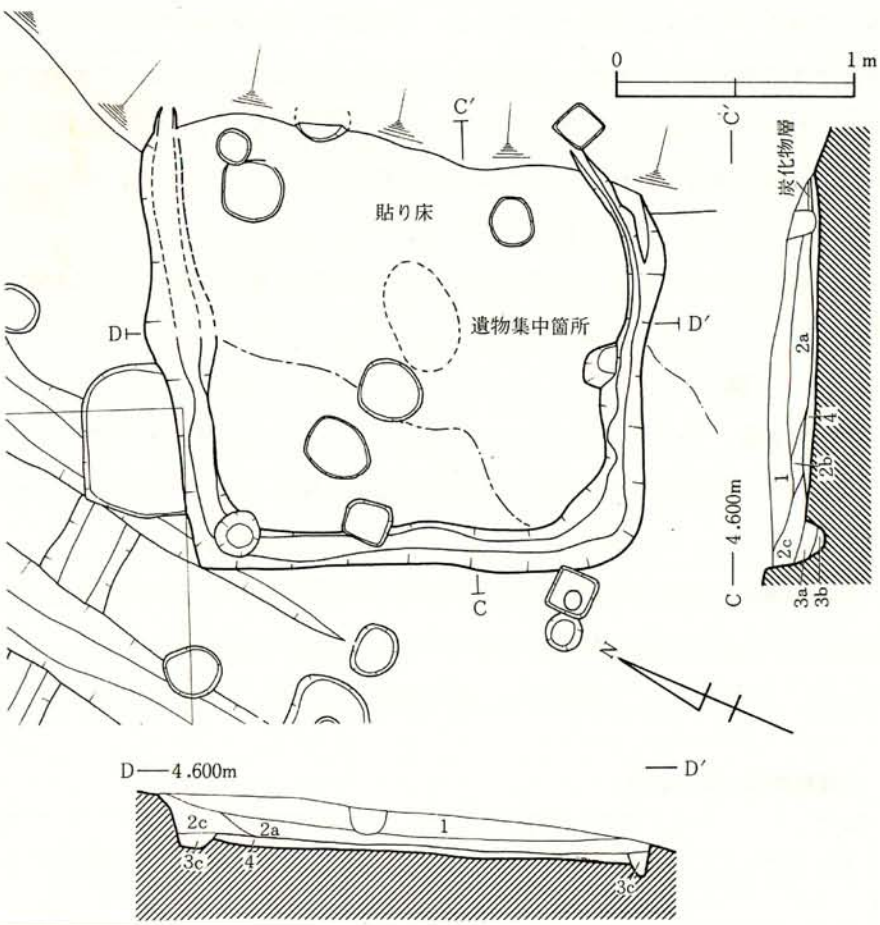


層位	土　色	備　考	層位	土　色	備　考
1	暗　褐　色 (10YR3/4)	地山粒が混じる。	4	灰 黄 褐 色 (10YR5/2)	地山粒を多く含む。
2	〃	焼土、炭化物を多量に含む。	b	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	貼り床
3	〃	灰色粘土質土や焼土、炭化物を含む	g	灰　白　色 (10YR7/1)	周　溝

第7図　SI 01実測図

が、床の貼り方からみれば若干西より東へ傾斜していた可能性も考えられる。カマドは、東辺の北東隅に付設されているが、焼土や炭化物が充塡する浅いくぼみとなってわずかに痕跡をとどめているにすぎない。周溝は北辺と西辺で検出しており、北辺のものは北東隅で止まっている。幅９～24cm、深さ約18cmで、断面形はゆるやかなU字形を呈している。周溝埋土は粘性のある灰白色シルトで、地山の小ブロックを含んでいるが下層は非常に均質である。床面上では多くの柱穴を検出しており、住居跡の外側にはほとんど存在しないことから、これらを本住居跡に伴なう柱穴とみることも可能であるが、明確な配置はとらえられなかった。遺物は少なく、須恵器杯、土製支脚等が出土したにすぎない。第６図２は須恵器杯の破片資料である。周溝埋土より出土している。第６図１は土製支脚の脚部と考えられるものである。外面はヨコナデ等の調整を一切行なわず粗い面をみせている。カマド前面の焼土中より出土している。

ＳＩ02竪穴住居跡　東側傾斜面の地山上で検出した竪穴住居跡である。東辺が後世の溝によって破壊されているが、他は壁が約25cmまで残存している。ＳＢ01建物跡と重複し、これより新しい。平面形は明らかではないが、およそ長方形を呈するものと考えられる。規模は西辺が1.8ｍであり、北辺1.95ｍ、南辺は1.8ｍまで検出した。方向は、西辺が北で23度



土層観察表

層位	土　色	備　考	層位	土　色	備　考
1	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	砂質　マンガン、地山粒を含む。	3 a	灰 黄 褐 色 (10YR5/2)	周溝　地山ブロックを含む。
2 a	灰 黄 褐 色 (10YR5/2)	〃　〃	3 b	〃	〃　炭化物を含む。
2 b	〃	〃　マンガン、地山粒を多く含む。	3 c	灰 黄 褐 色 (10YR5/2)	〃　やや粘性あり。
2 c	〃	〃　地山粒、炭化物を含む。	4	にぶい黄色 (2.5Y6/4)	貼り床　地山粒を多く含む。

第８図　ＳＩ02実測図

西に偏している。床は、北西隅を除くほぼ全面に貼り床がみられた。貼り床は、地山細粒を含むにぶい黄褐色シルトで行なわれており、厚さは約4㎝である。床面は平坦でほぼ水平である。カマドは検出できなかったが、東端のほぼ中央部の床面上に炭化物が約1㎝の厚さで堆積しているのがみられた。もしカマドが付設されていたとすれば、この周辺にあった可能性が強い。周溝は、破壊されている東辺を除き各辺を連続して巡っている。幅は7～17㎝、深さ2～10㎝で、断面形はゆるやかなU字形を呈している。周溝埋土は、やや粘性のある灰黄褐色シルトで均質である。柱穴は検出できなかった。住居内埋土は大きく2層に分けられるが、いずれも砂質シルトを主体としてよくしまっており、地山粒やマンガン粒を含んでいる。西側から順に堆積していった状況を呈しており、自然に埋没したものと考えられる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、「円形の小石」等が出土している。土器類は少なく、すべて堆積層の上層より出土している。摩滅して調整など不明なものが多いが、土師器杯の中には、調整にロクロを使用していないものが1点出土している。「円形の小石」は貼り床中から出土したもので、住居跡のほぼ中央部の狭い範囲から集中して出土している。17点出土しており、白色のものが7点、黒色のものが10点ある。形態は歪んでいるがほぼ円形を呈し、大きさは径1.2～1.8㎝である。表面には加工痕など一切みられず自然石と考えられる。このような小石を碁石として報告しているものがあるが、確実に碁石とされているものと比較した場合、形状、大きさに統一性がなく、自然石のままであることを考えるならば、住居の構築に際して行なった何らかの祭祀に関する遺物として把えておきたい。

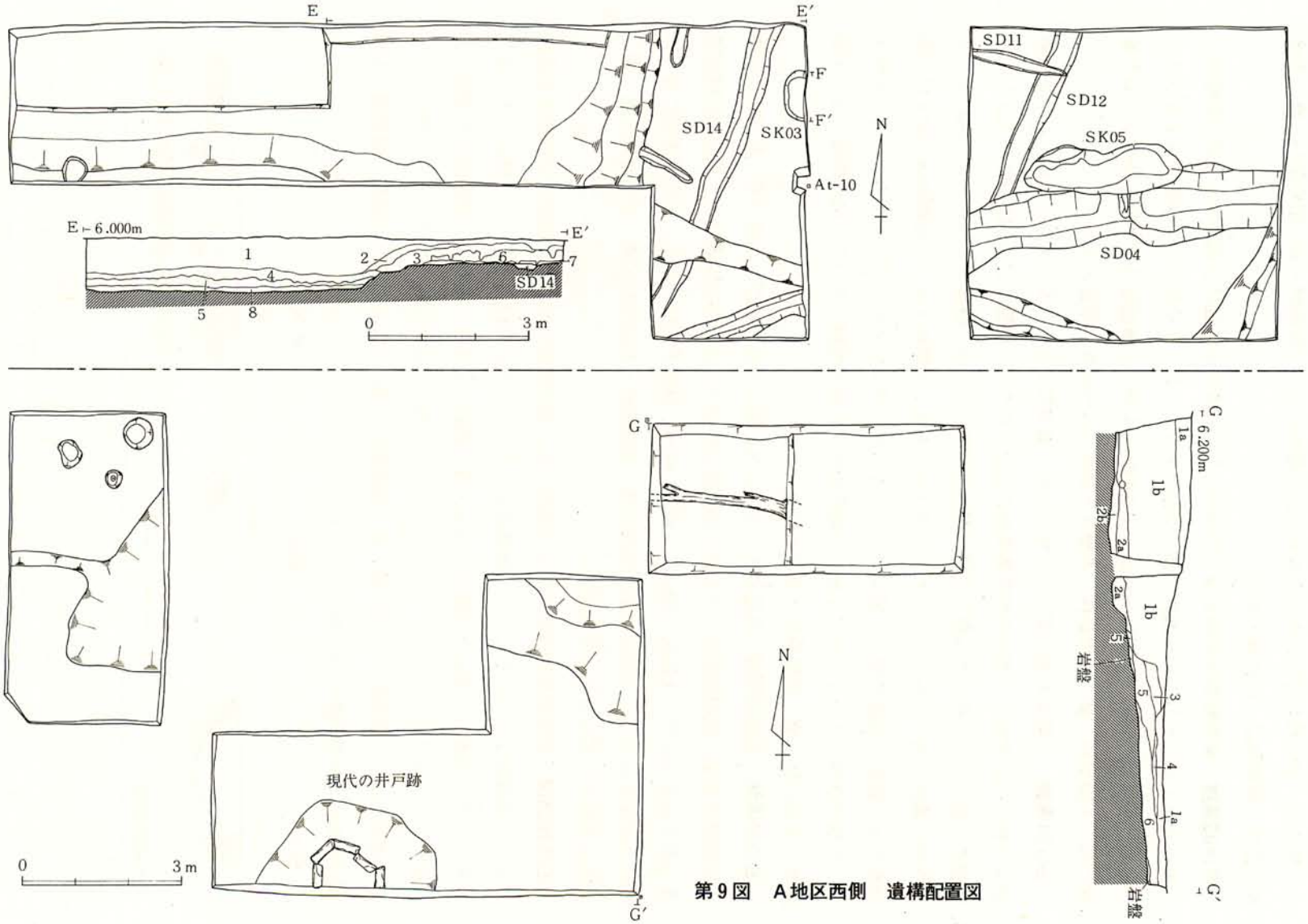
(4) 溝　跡

SD01溝跡　平坦面東側の地山上で検出した。SD02溝跡と重複関係にあり、これより新しい。方向は、発掘基準線に対して北で約18度東に偏している。長さは5.5mで、上幅約30㎝、深さ6㎝を計る。出土遺物には、土師器杯、須恵器杯がある。

SD02溝跡　平坦面東側の地山上で検出した。重複関係からSD01溝跡より古く、SD10・13溝跡より新しい。方向は、発掘基準線に対して北で約57度東に偏している。確認できる長さは9.5mで、上幅約70㎝、下幅約20㎝、深さ約20㎝を計る。底面は丸底気味で、壁はゆるやかに開

土層観察表（第9図中）

層位	土　色	備　考	層位	土　色	備　考
Ⅲ区　At-08～10グリット東西セクション（E～E′）			Ⅱ区　Aq～As-50グリット南北セクション（G～G′）		
1	にぶい黄橙色（10YR7/3）	ブロックを多量に含む	1a	黄　褐　色（10YR5/6）	盛　土
2	灰　色（7.5YR5/1）		1b	灰　黄　色（10YR5/2）	〃
3	にぶい黄橙色（10YR5/4）	地山ブロック、炭化物を若干含む	2a	灰　色（5Y5/1）	粘土　旧水田耕作土
4a	青　灰　色（5BG5/1）	砂質	2b	灰　白　色（5GY8/1）	〃　旧水田床土
4b	〃	砂	3	灰黄褐色（10YR5/2）	地山ブロックを含む
5	〃	粘土質　地山ブロックを少量含む	4	黄　褐　色（10YR5/6）	
6	褐　灰　色（7.5YR5/1）	マンガン粒を多量に含む、土器小片も含む	5	にぶい黄橙色（10YR6/4）	明褐色の粒子を含む
7	灰　白　色（2.5Y）	〃　遺物を若干含む	6	黄　褐　色（10YR5/6）	黄色・明褐色の粒子を含む
8	明緑灰色（10G7/1）	岩盤の漸移層			



第9図　A地区西側　遺構配置図

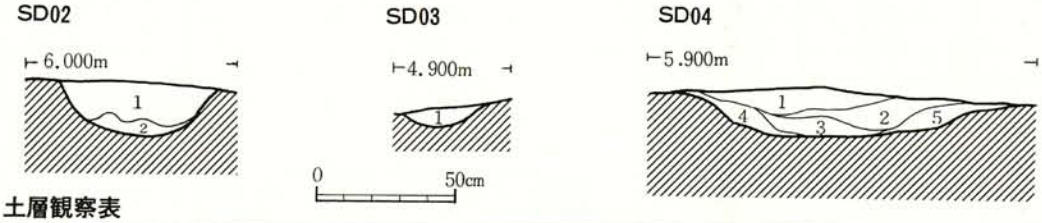
く。埋土は、地山粒を含むシルトである。出土遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯、緑釉陶器、円面硯がある。

SD03溝跡　東側傾斜面の第Ⅱ層上で検出した。南北方向に延びる溝跡であるが、南壁近くで東へ弯曲する。SD05～08溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。確認できる長さは8.5mで、上幅30～50cm、下幅10～30cm、深さ約10cmを計る。断面形は舟底形を呈する。出土遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯、赤焼き土器杯・高台付杯、平瓦がある。

SD04溝跡　平坦面東側の地山上で検出した。重複関係からSK05土坑より古く、SD12溝跡より新しい。方向は、東西の発掘基準線にほぼ一致する。形態は、Au-12・13グリット内では中央付近でふくらみ、20cm程一段深く掘り下げられている。確認できる長さは、Au-10グリット内の溝跡と同一とみられることから11.5mである。上幅約1m、下幅約30cm、深さ15～30cmを計る。底面はほぼ平坦で、壁は外反しながらゆるやかに立ち上がる。埋土は3層に大別され、下層が砂質シルトで、その上層には粘性の強い土層が堆積している。出土遺物には、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕がある。

SD05溝跡　東側傾斜面の第Ⅲ層上で検出した。南北方向へ延び、北側で東へL字状に屈曲する溝跡である。重複関係からSD03・08溝跡より古く、SD06・07溝跡より新しい。確認できる長さは5.5mで、上幅50～90cm、下幅30～60cm、深さ約10cmを計る。底面は平坦に近く、壁は丸味をもって立ち上がる。出土遺物には、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕・壺、赤焼き土器杯・高台付杯、平瓦がある。

SD06溝跡　東側傾斜面の第Ⅳ層上で検出した。南北方向へ延び、西側で東へ屈曲する溝跡である。重複関係からSD03・05・08溝跡より古く、SD07溝跡より新しい。確認できる長さは6.5mで、上幅30～70cm、下幅10～35cm、深さ約20cmを計る。底面は、屈曲部より南側では平坦に近く、壁は丸味をもって立ち上がる。一方、東側では幅がやや狭まり南壁に段を有する。出土遺物には、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦がある。土師器、須恵器とも底部が回転糸切り無調整の杯が出土している。



土層観察表

層位	土色	備考
SD02		
1	灰黄褐色(10YR5/2)	地山ブロックと炭化物を含む
2	褐灰色(10YR4/1)	地山の黄褐色土を斑状に含む
SD03		
1	黒褐色(10YR3/1)	地山粒・炭化物・土器片を含む

層位	土色	備考
SD04		
1	褐灰色(5YR5/1)	砂質　マンガン粒を含む
2	褐灰色(5YR5/1)	〃　白色粒を含む
3	灰白色(10YR7/1)	粘土質　地山粒・マンガン粒を含む
4	にぶい黄橙色(10YR7/2)	砂質
5	〃	〃

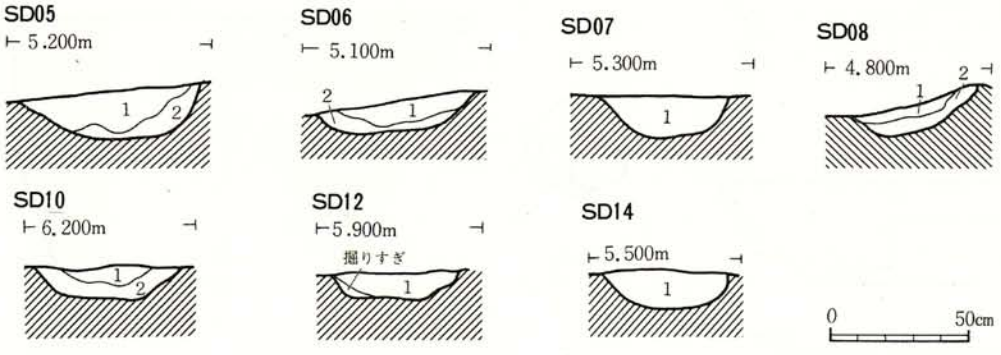
第10図　SD02・03・04セクション図

SD07溝跡　東側傾斜面の第Ⅳ層上で検出した東西方向に弯曲気味に延びる溝跡である。SD03・05・06溝跡と重複関係にあり、これらより古い。確認できる長さは5.5mで、上幅50～90cm、下幅30～60cm、深さ約10cmを計る。断面形は舟底形である。また、西端では平面形が不整形に広がり、土坑状の形態を呈する。埋土は褐灰色シルトからなり、特に土坑状の箇所で炭化物や土器小片を多く含む。遺物はロクロ使用の土師器が主体を占め、内面にヘラミガキ・黒色処理を施し、底部が回転糸切り無調整の杯の出土が顕著である。他に土師器甕、須恵器杯・蓋・甕、丸瓦が出土している。

SD08溝跡　東側傾斜面の第Ⅲ層上で検出した南北方向に延びる溝跡である。重複関係からSD03溝跡より古く、SD05～07溝跡より新しい。確認できる長さは6.5mで、上幅35～50cm下幅15～40cm、深さ約10cmを計る。底面は平坦に近く、壁はゆるやかに立ち上がる。出土遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺がある。

SD09溝跡　平坦面東側の地山上で検出した。SD10溝跡と重複関係にあり、これより新しい。方向は、発掘基準線に対して北で約20度東に偏している。長さは、南への延びが現代の溝に壊されて不明であるが、その南側で確認できなかったことより3m以内におさまる小溝である。上幅約60cm、下幅約10cmを計る。出土遺物には、土師器杯・甕、須恵器壺、瓦がある。

SD10溝跡　平坦面東側の地山上で検出した。SD02・09溝跡と重複関係にあり、これらより古い。方向は、発掘基準線に対して北で約20度東に偏している。確認できる長さは11.6mで、上幅約70cm、下幅約40cm、深さ約10cmを計り、断面形は扁平なU字形である。埋土は2層に大別され、下層は上層より硬くしまりのある土層で、マンガン粒を多量に含む。出土遺物には、



土層観察表

層位	土色	備考
SD05		
1	褐灰色（7.5YR4/1）	炭化物と地山粒を若干含む
2	灰褐色（7.5YR5/2）	炭化物と地山粒を若干含む
SD06		
1	褐灰色（7.5YR4/1）	炭化物を多く含む
2	灰褐色（7.5YR5/2）	炭化物と地山粒を若干含む
SD07		
1	褐灰色（7.5YR4/1）	地山粒・炭化物・土器片を多く含む
SD08		
1	褐灰色（7.5YR4/1）	地山粒・炭化物を含む
2	灰褐色（7.5YR5/2）	地山粒を多く含む
SD10		
1	明褐灰色（7.5YR7/1）	砂質　マンガン粒・地山粒を含む
2	褐灰色（7.5YR4/1）	粘土質　マンガン粒を多量に含む
SD12		
1	褐灰色（10YR4/1）	マンガン粒を多量に含む
SD14		
1	明褐灰色（7.5YR7/1）	マンガン粒を多量に含む

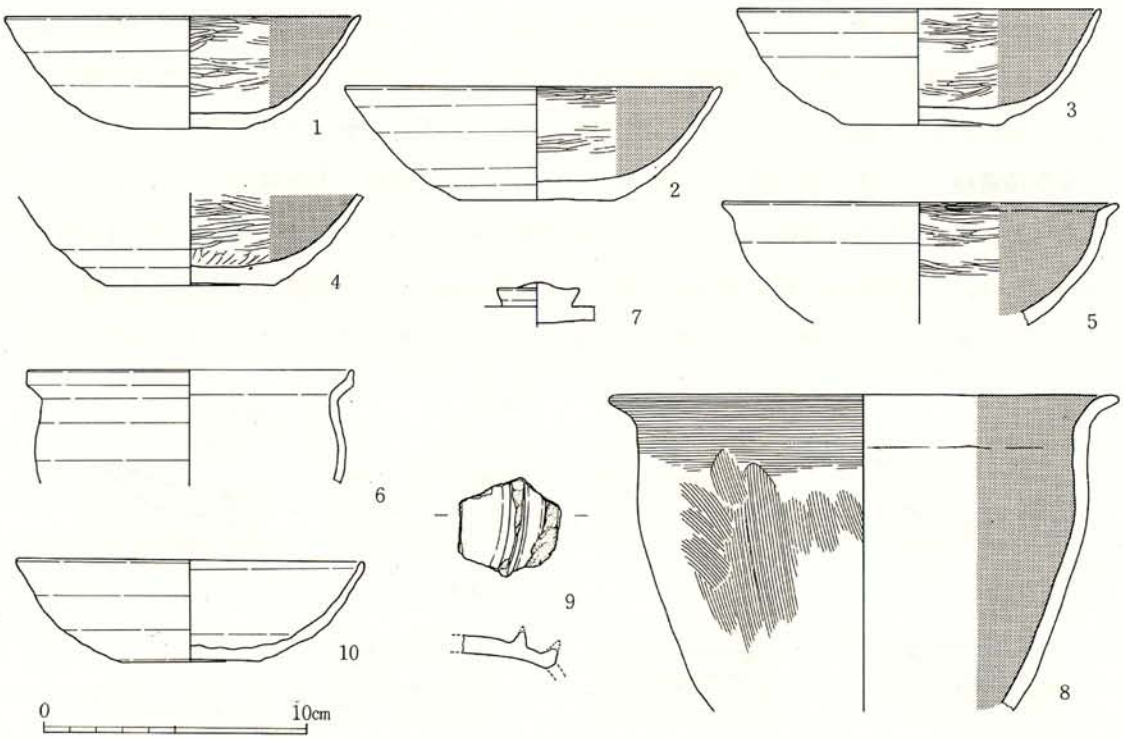
第11図　SD05～08・10・12・14セクション図

土師器杯・甕があり、特に第12図８の甕はロクロ未使用のもので、口縁部が外反し体部が外傾する。器面調整は、口縁部外面がヨコナデ、体部がヘラナデ、内面は摩滅しているが部分的にヘラミガキ・黒色処理が認められる。

SD11溝跡　平坦面東側の地山上で検出した。ＳＤ12溝跡と重複関係にあり、これより新しい。方向は、発掘基準線に対して東で約12度南に偏している。確認できる長さは1.9ｍで、上幅約30cm、深さ約５cmを計る。出土遺物はない。

SD12溝跡　平坦面東側の地山上で検出した。ＳＤ04・11溝跡と重複関係にあり、これらより古い。方向は、発掘基準線に対して北で約23度東に偏している。確認できる長さは3.4ｍで、上幅約50cm、深さ約10cmを計る。埋土は、マンガン粒を多量に含む硬い土層である。出土遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯がある。

SD13溝跡　平坦面東側の地山上で検出した。ＳＤ02・09溝跡と重複関係にあり、これらよ



No.	種　別	器形	遺　構	外　面　調　整	内　面　調　整	口径	底径	器高	備　　考
1	土　師　器	杯	SD 07	ロクロナデ　底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	13.5	4.2	4.3	完形
2	〃	〃	〃	〃　〃	〃	14.3	5.8	4.3	底部外面ヘラ描き
3	〃	〃	〃	〃　〃	〃	13.9	6.2	4.4	「X」
4	〃	〃	SD 06	〃　〃	〃		6.4		
5	〃	〃	SD 07	〃	〃	(15.0)			
6	〃	甕	〃	〃	ロクロナデ	(12.4)			
7	須　恵　器	蓋	〃	〃	〃				つまみ径3.2cm
8	土　師　器	甕	SD 10	口縁部ヨコナデ体部ヘラナデ	磨滅のため不明	(19.3)			
9	円　面　硯		SD 01	ロクロナデ	ロクロナデ				脚部に透し
10	赤焼き土器	杯	現代溝	〃　底部回転糸切り	〃	13.3	5.2	3.8	

第12図　溝跡出土遺物

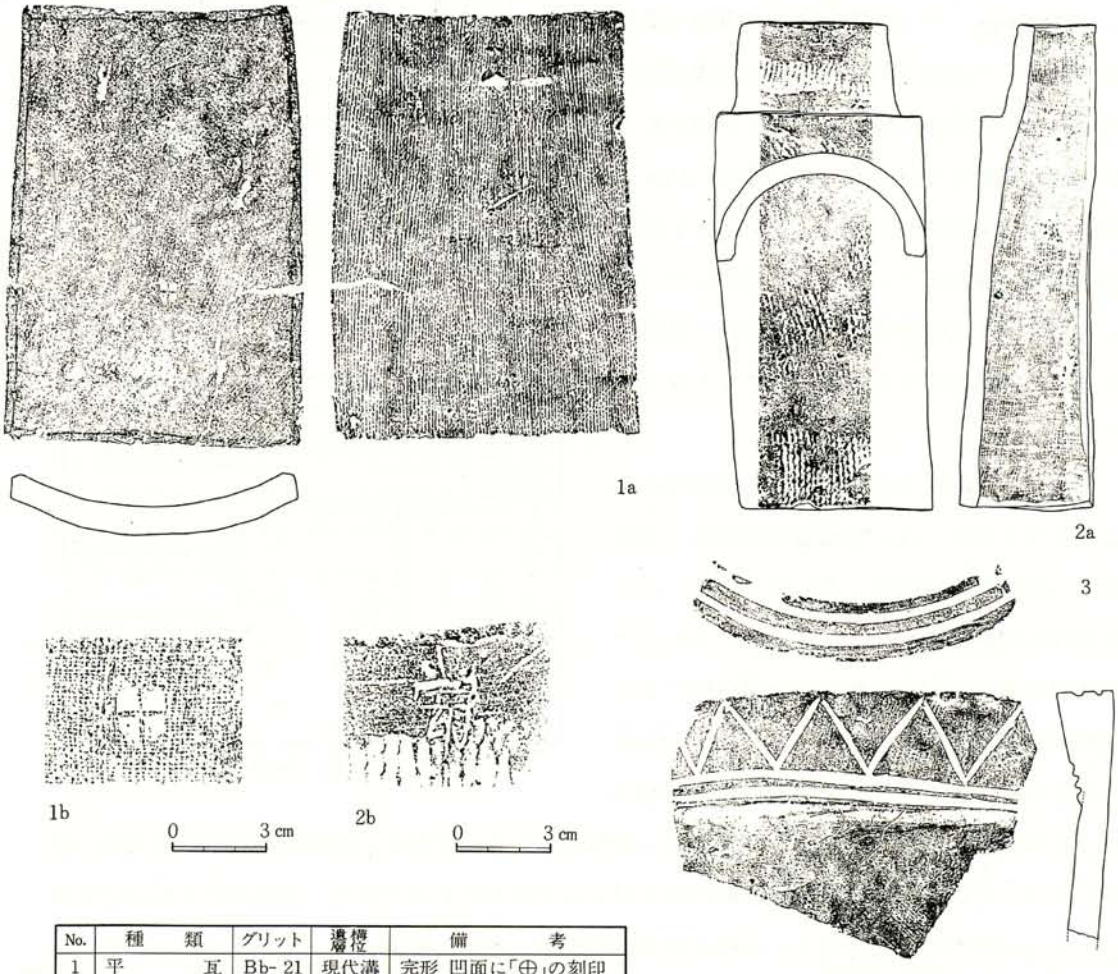
り古い、検出した範囲ではL字状を呈し、確認できる長さは3.0mで、上幅約30cm、深さ6cmを計る。出土遺物はない。

SD14溝跡　平坦面東側の地山上で検出した。方向は、発掘基準線に対して北で約26度東に偏している。確認できる長さは5.8mで、上幅約50cm、下幅約30cm、深さ約20cmを計る。底面はやや丸味を帯び、壁はゆるやかに内弯しながら立ち上がる。埋土は、粘性に乏しいが硬くしまりのある土層である。出土遺物はない。

（現代の溝跡）SD07溝跡の北側に位置する。北西から南東方向へ延び、東側で北へ屈曲する溝跡である。昭和初期に作られたもので、底面には多賀城廃寺跡より運んできたという須恵器大甕の破片や瓦が敷きつめられている。

(5) 土　坑

SK03土坑　平坦面東側、At-10グリットの東壁付近の地山上で検出した。平面形は楕円形



No.	種　類	グリット	遺構層位	備　考
1	平　瓦	Bb-21	現代溝	完形 凹面に「⊕」の刻印
2	丸　瓦	〃	現代溝	完形 「常」のヘラ描き
3	重弧文軒平瓦	As-01	Ⅰ　層	

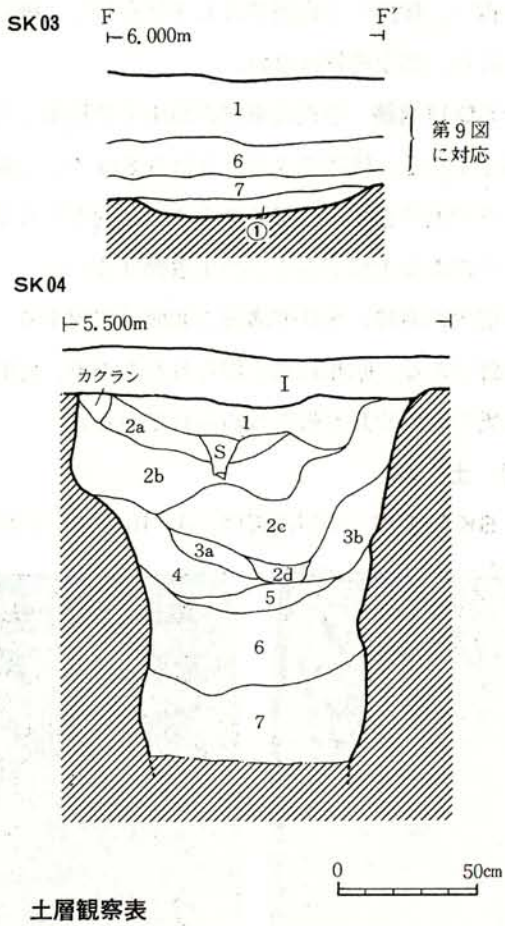
第13図　出土遺物（瓦）

で、長軸約1m、短軸0.2m以上、深さは5cmを計る。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は、粘性に乏しい硬い明褐色シルトである。出土遺物には、土師器杯・甕がある。

SK05土坑　平坦面東側の地山上で検出した土坑である。SD04溝跡と重複し、これより新しい。平面形は不整長楕円形で、長軸3m、短軸0.9m、深さ10cmを計る。断面形は偏平なU字形で、底面はやや凹凸がある。出土遺物はない。

SK06土坑　SI01住居跡の北西隅の床面上で検出した土坑である。約半分は調査区外へ延びるため全体の形状、規模は不明であるが、調査部分についてみると、長軸1.45m、短軸0.5m、深さ35cmを計る。埋土はSI01住居跡の床を構築しているものと近似している。この底面より土師器甕が1点つぶれた状態で出土した（第15図2）。調整にロクロを使用したものである。

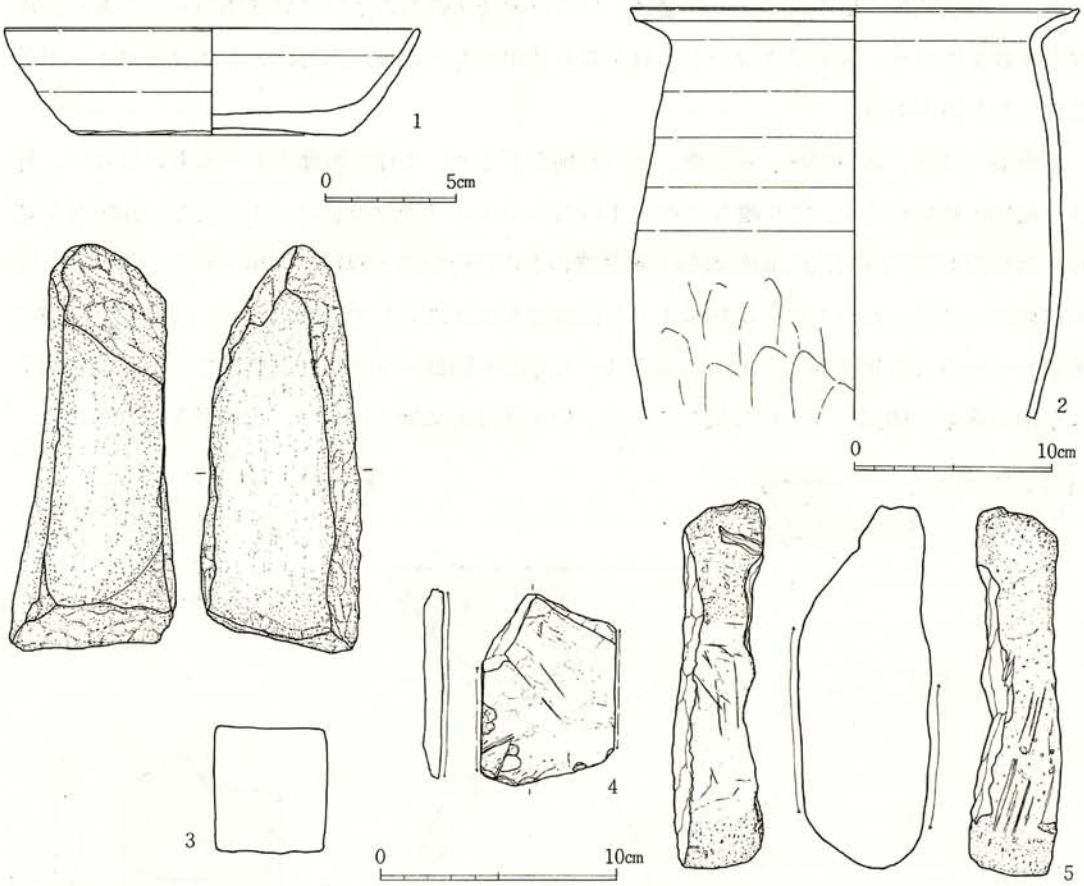
なお、この他にSK01・02・04土坑がある。これらの土坑からは、土師器や須恵器（第15図1）、砥石（第15図3～5）などとともに近世以降の陶磁器類が出土している。SK01土坑は隅丸方形を呈し、断面形は逆台形である。施釉陶器皿（志野）が出土している。SK02土坑は長楕円形を呈し、長軸3.0m、短軸1.6m、深さ約35cmを計る。中央より南寄りに円形の落ち込みがある。施釉陶器の燈明皿や杯、皿類が出土している。SK04土坑は略円形を呈する円筒状のものである。深さは2.5m以上を計る。近世以降の陶磁器とともに中世の施釉陶器華瓶（瀬戸、図版18の5）が1点出土している。SK04土坑は、その形態的特徴から素掘りの井戸跡と考えられる。その他のものについては性格不明である。



土層観察表

層位	土色	備考
SK03		
①	明褐灰色(7.5YR7/1)	マンガン粒を多量に含む
SK04		
1	にぶい黄橙色(10YR7/2)	
2a	明褐灰色(7.5YR7/1)	砂質　地山ブロックを少々含む
2b	〃	〃　地山ブロックをやや多く含む
2c	灰白色(10YR7/1)	〃　地山ブロックを多量に含む
2d	灰白色(2.5Y7/1)	粘土質
3a	灰色(N6/)	〃　地山ブロックを含む
3b	〃	〃　〃
4	灰色(5Y5/1)	砂　地山ブロックを多量に含む
5	〃	〃　地山粒を含む
6	灰白色(2.5Y)	粘土
7	灰色(5Y5/1)	〃　部分的にややグライ化

第14図　SK03・04セクション図



No.	種類	器形	遺構	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	杯	ＳＫ04	ロクロナデ、回転糸切り後手持ちヘラ削り	ロクロナデ	(16.8)	11.8	4.2	
2	土師器	甕	ＳＫ06	〃　体部下半ヘラ削り	〃	22.7			
3	砥石　ＳＫ02 出土			4	砥石　ＳＫ04 出土		5	砥石　ＳＫ04 出土	

第15図　土坑出土遺物

〈堆積層出土の遺物〉

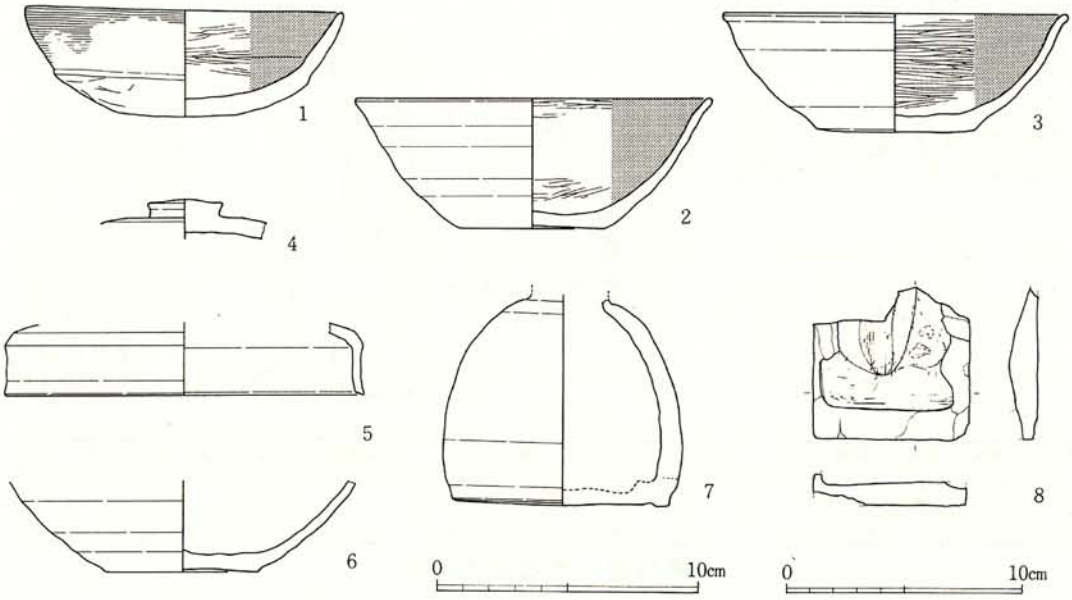
第Ⅰ層からは、土師器（第16図２・３）、須恵器、赤焼き土器、緑釉陶器、瓦、近世以降の陶磁器、金属製品（釘等）、石製品（砥石・硯）、木製品（櫛）が出土している。

第Ⅱ～Ⅳ層からは、土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦が出土している。いずれも形態がわかるものは少なく、全体に摩滅したものが多い。以下、その概略を述べるが、器種によっては細片のため記述できないものがある。

土師器には杯、高台付杯、甕、鉢の器種がある。杯はロクロ未使用のものが若干ある他は、すべてロクロ使用のものである。第16図１はロクロ未使用のもので、体部から口縁部が内弯気味に立ち上がり、底部は丸底状である。外面には段が巡り、対応する内面にもゆるい稜をもつ。調整は外面が段から口縁部にかけてヨコナデ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。ロクロ調整のものは図示できないが、底部がすべて回転糸切り無調整のもので、内面にはヘラ

ミガキ・黒色処理が施されている。甕は、ロクロ未使用のものとロクロ使用のものがあり、後者が多数を占める。図示できないが、ロクロ未使用のものには、内外面ともヘラミガキ・黒色処理したものがある。

須恵器には杯、高台付杯、蓋、甕、壺の器種があるが、全体の形態がわかるものはない。杯は、底部の特徴から1、切り離し不明で手持ちヘラケズリ調整のもの（1点)、2、回転ヘラ切り無調整のもの(1点)、3、回転糸切り無調整のもの(5点)の3種類に分類される。蓋には、擬宝珠形のつまみをもつもの（第16図4）と口縁部がほぼ直立して立ち上がり、天井部との境に稜をもつもの（第16図5）がある。後者は、天井部を回転ヘラケズリ調整している。第16図7は小形の壺で、頸部より上を欠損している。最大径は底部近くにあり、釣鐘形を呈する。



No.	種類	器形	グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	Bc-22	Ⅱ層	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	12.1		4.1	
2	〃	〃	Bb-22	Ⅰ層	ロクロナデ 底部 回転糸切り	〃	(13.7)	5.4	5.0	
3	〃	〃	Bb-21	〃	〃 〃	〃	(13.2)	6.0	4.5	
4	須恵器	蓋	Aa-23	Ⅱ層	〃	ロクロナデ				つまみ径2.9cm
5	〃	〃	Bc-23	〃	〃 天井部 回転ヘラ削り	〃	(13.8)			
6	〃	杯	Bc-24	〃	〃 底部 回転糸切り	〃		(5.8)		
7	〃	壺	〃	Ⅲ層	〃 底部 手持ヘラ削り	〃				
8	硯	—	Av-19	Ⅰ層	—	—	—	—	—	

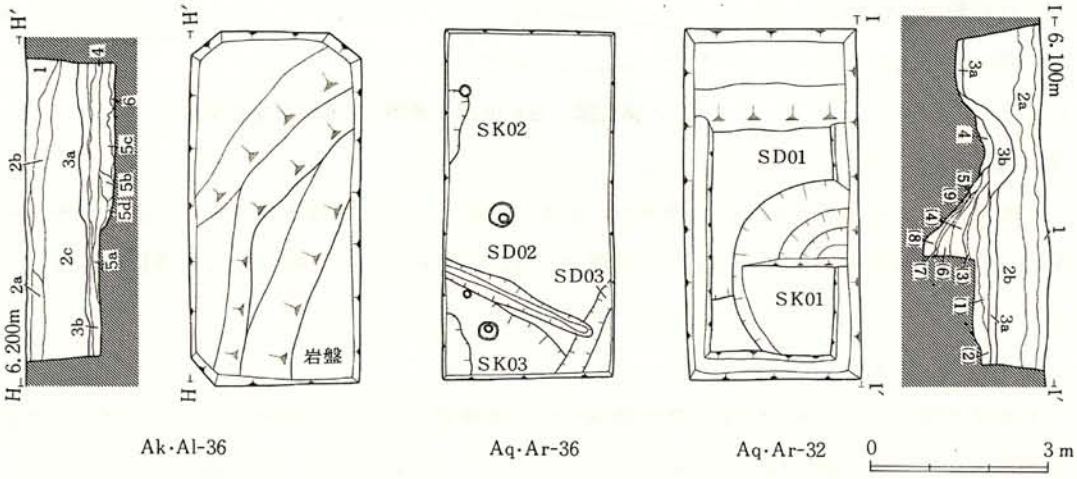
第16図　堆積土出土遺物

2．B地区

本地区は、調査対象地域のほぼ中央にあたり、北側と東側を道路によって区画される平坦地である。今回は遺構の所在確認を目的として、7本のトレンチを設定して調査を行なった。遺構の調査は、確認段階でとどめることを原則としたが、およその性格や年代をつかむため、一部掘り込み調査を行なったものもある。

〈地形と基本層位〉

各トレンチでの断面観察の結果、本地区の旧地形は現地形とはかなり異なった様相を呈していたことが判明した。まず東端部では、A地区から続く岩盤面が地表からわずか20cm程の深さで観察できる。この岩盤面は、これより西側で北西方向に急激に落ち込み、沖積層の下に埋没している。また、本地区の西半部は旧地形の北斜面を段状に整地して、近年まで水田として利用していたことが確認できた。現在は、その上に厚く盛土が行なわれており、旧水田面までの深さは一段高い南側で約0.8m、北側で1.5mを計る。遺構は南半部において、旧表土及び旧水田面から約10cm下の地山上で検出した。この地山は、東側（Aq・Ar-36グリット）が黄褐色ローム層、西側（Aq・Ar-29、Aq・Ar-32グリット）が灰色シルト質砂層である。北半部では削平を受けているためか、遺構は確認できなかった。



土層観察表

層位	土色	備考
Ak・Al-36グリット(H～H′)		
1	褐色(10YR3/6)	表土
2a	褐色(7.5YR4/3)	盛土 凝灰岩質の礫を多量に含む
2b	黒褐色(10YR3/2)	〃 黄褐色土を粒状に若干含む
2c	暗灰黄色(2.5Y5/2)	〃 凝灰岩質の礫を多量に含む
3a	灰黄褐色(10YR5/2)	旧表土 酸化鉄斑を含む
3b	黄灰色(2.5Y5/1)	〃 粘土質 酸化鉄斑を含む
4	黄褐色(2.5Y5/4)	
5a	にぶい黄橙色(10YR6/4)	黄褐色土を粒状に若干含む
5b	灰黄褐色(10YR5/2)	〃
5c	黒褐色(10YR3/2)	〃
5d	黒褐色(10YR3/1)	〃
6	にぶい黄色(2.5Y6/4)	粘土質 〃
Aq・Ar-32グリット(I～I′)		
1	褐色(10YR4/4)	表土

層位	土色	備考
2a	にぶい黄褐色(10YR5/3)	盛土 凝灰岩質の礫を多量に含む
2b	灰黄褐色(10YR5/2)	〃 〃
3a	暗緑灰色(7.5GY4/1)	粘土質 旧水田耕作土
3b	にぶい黄橙色(10YR6/4)	〃 旧畦畔
4	褐灰色(10YR6/1)	酸化鉄をしもふり状に含む
SK01		
(1)	灰オリーブ色(5Y5/2)	地山ブロックを含む
(2)	暗灰黄色(2.5Y5/2)	地山粒を若干含む
(3)	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質 酸化鉄を含む
(4)	褐灰色(10YR5/1)	粘土質
(5)	褐灰色(10YR6/1)	砂質
(6)	灰色(5Y4/1)	粘土質
(7)	オリーブ黒色(5Y3/1)	〃 植物遺体を含む
(8)	灰色(5Y5/1)	〃
(9)	灰色(7.5Y5/1)	砂質

第17図　B地区各グリット実測図

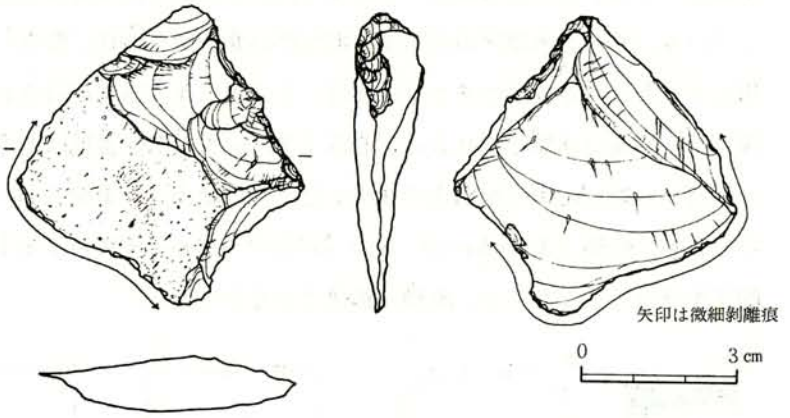
〈発見遺構と遺物〉

本地区で検出した遺構は、溝跡3条、土坑3基、柱痕跡が認められる柱穴2個である。

SD01溝跡は、Aq-29とAq-32グリットで検出でき、東西方向に延びるものと考えられる。

しかし、北側のプランを確認しておらず、また掘り込み調査を行なっていないことから詳細は不明である。

ＳＫ01土坑は、Aq・Ar-32グリットに位置する。ＳＤ01溝跡と重複し、これより新しい。ほぼ円形を呈する擂鉢状のもので、深さ約１ｍを計る。形態や規模、埋土の状況等から井戸跡である可能性が強い。出土遺物には土師器杯、須恵器甕があり、他に頁岩製の二次加工ある剝片が出土している。



第18図　ＳＫ01出土遺物（二次加工ある剝片）

３．Ｃ地区

本地区は、舌状に張り出した丘陵部の北斜面に位置している。調査にあたっては、地形の状況に応じて２本のトレンチを設定し、遺構の所在確認を行なった。確認後は、遺構の性格、規模等を把握するため、一部でトレンチの拡張を行なった。

〈地形と基本層位〉

本地区では、表土の下に近世以降の遺物を含む堆積層がみられ、東側トレンチでは、この層を掘り込んだ溝やこれに伴なう段築などもみられる。この層の下は、すぐ地山となっており、竪穴住居跡や土坑の検出面となっている。また西側トレンチの緩い斜面には、傾斜に沿って不整形の溝状の落ち込みがある。なお、地山は凝灰岩質の岩盤が露出している部分があるが、その他の部分では黄褐色のローム層となっている。

〈発見遺構と遺物〉

ＳＩ01竪穴住居跡　地山上で検出した住居跡である。削平が著しく、壁はわずかに４㎝程残存しているにすぎない。ＳＩ02住居跡と重複し、それより新しい。全体を検出していないため形態は明らかではないが、おそらく長方形を呈するものとみられる。規模は南辺が約3.4ｍであり、西辺は4.2ｍ、東辺は2.4ｍまで検出している。南壁のやや西寄りにカマドが付設されており、袖の一部が残っている。東辺には幅約2.5㎝の周溝が巡っている。遺物は、土師器甕、須恵器杯・甕等が出土している。

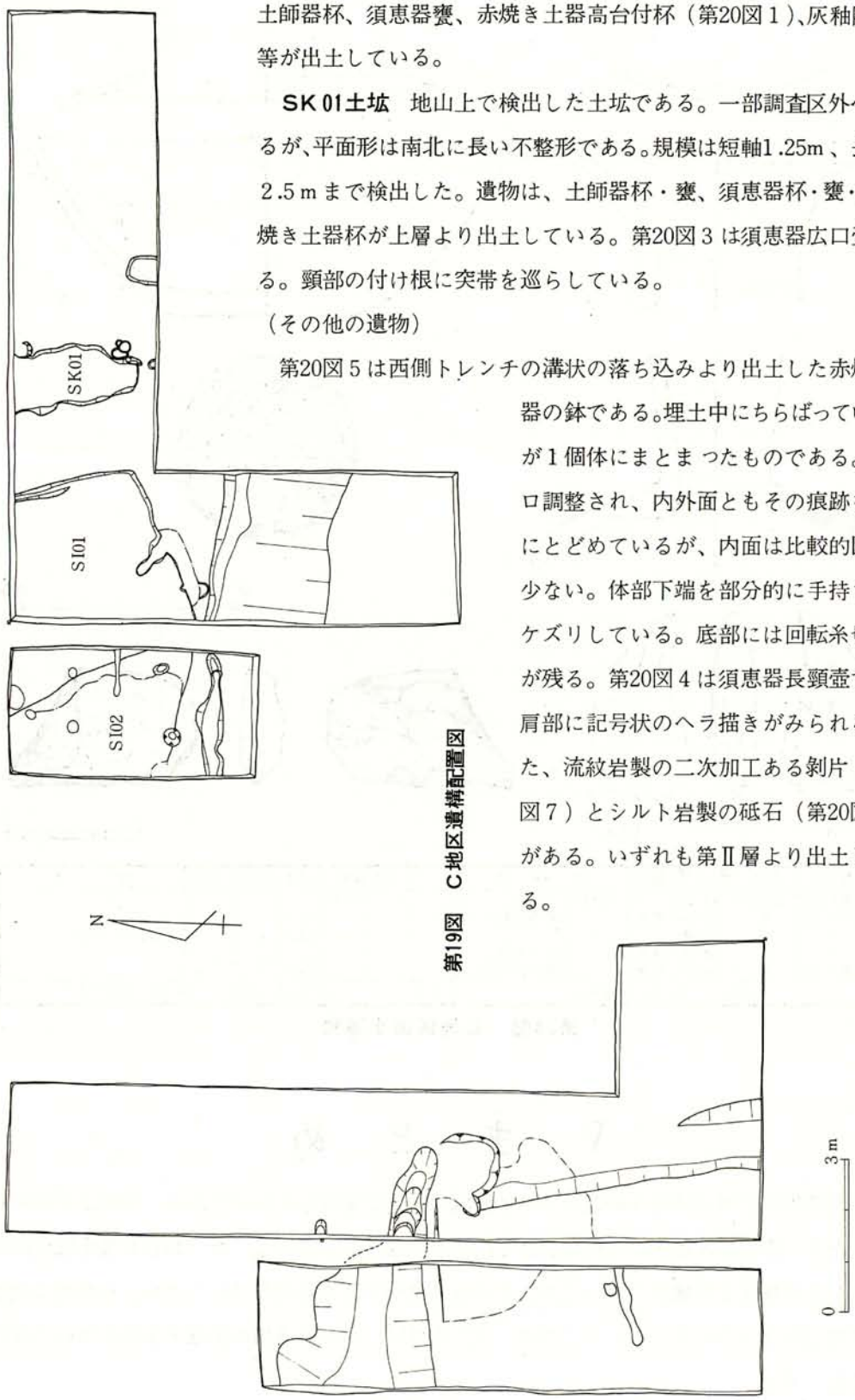
ＳＩ02竪穴住居跡　地山上で検出した住居跡である。ＳＩ01住居跡と重複し、それよりも古い。形態、規模は不明であるが既に床面まで削平を受けており、残存状態は良くない。遺物は、

土師器杯、須恵器甕、赤焼き土器高台付杯（第20図１）、灰釉陶器椀等が出土している。

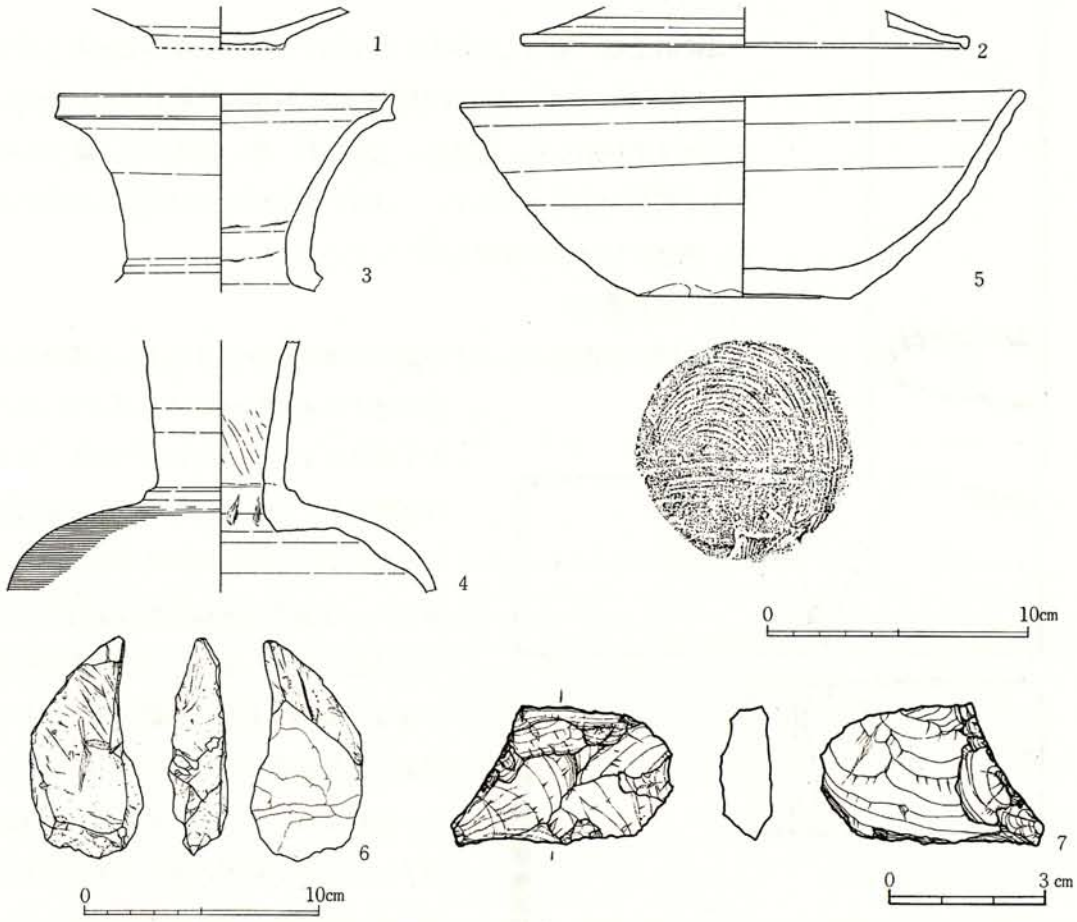
SK01土坑　地山上で検出した土坑である。一部調査区外へ延びるが、平面形は南北に長い不整形である。規模は短軸1.25m、長軸は2.5mまで検出した。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺、赤焼き土器杯が上層より出土している。第20図３は須恵器広口壺である。頸部の付け根に突帯を巡らしている。

（その他の遺物）

第20図５は西側トレンチの溝状の落ち込みより出土した赤焼き土器の鉢である。埋土中にちらばっていたのが１個体にまとまったものである。ロクロ調整され、内外面ともその痕跡を明瞭にとどめているが、内面は比較的凹凸が少ない。体部下端を部分的に手持ちヘラケズリしている。底部には回転糸切り痕が残る。第20図４は須恵器長頸壺である。肩部に記号状のヘラ描きがみられる。また、流紋岩製の二次加工ある剥片（第20図７）とシルト岩製の砥石（第20図６）がある。いずれも第Ⅱ層より出土している。



第19図　C地区遺構配置図



No.	種類	器形	遺構グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	赤焼き土器	高台杯	SI 02		ロクロナデ	ロクロナデ				
2	須恵器	蓋	Ax-06	Ⅱ層	〃 天井部回転ヘラ削り	〃	(17.3)			
3	〃	壺	SK 01		〃	〃	13.1			肩部にヘラ描き
4	〃	〃	Ag-01	Ⅱ層	〃 肩部カキ目	〃				
5	赤焼き土器	鉢	Ba-01	Ⅲ層	〃 体部回転拳状ヘラ削り	〃	21.6	8.1	7.6	
6	砥石 Ay-01 Ⅱ層出土					7	二次加工ある剥片 Ba-01 Ⅱ層出土			

第20図　C地区出土遺物

Ⅴ　ま　と　め

都市計画街路工事に伴なう調査は２ケ年計画の予定で実施したものである。今回はその初年度にあたり、調査はＡ地区の東側傾斜面と西側平坦面を中心に行なった。調査対象地域の西半部にあたるＢ地区とＣ地区については、本年度は遺構の所在確認だけにとどめ、本格的な調査は次年度に行なうこととした。ここでは、主にＡ地区における遺構の変遷と年代について検討することにする。

A地区で検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟、柱列跡1条、竪穴住居跡2軒、溝跡14条、土坑6基、その他多数の小柱穴である。これらを検出面と重複関係からまとめると下表のようになる。

位置＼検出面	地山	第Ⅳ層	第Ⅲ層	第Ⅱ層
東側傾斜面	SA01↘ SB01→SI01→(SK06) ↘SI02 ※ なお、SK06は第Ⅲ層に覆われるが第Ⅳ層との関係は不明である。	SD07→SD06	SD05→SD08	SD03
西側平坦面	SD13→SD10→SD02→SD01 ↘SD09 SD12→SD04→SK05 SD14↘SD11 SK03			

東側傾斜面において地山上で検出した遺構は、掘立柱建物跡・柱列跡→竪穴住居跡の変遷を追うことができる。いずれも出土遺物が僅少であるため、詳しい年代は決め難いものがある。しかし、これらの遺構を直接覆っている第Ⅲ層と第Ⅳ層から赤焼き土器が出土していることから、少なくとも竪穴住居跡については、10世紀をその下限とみることができる（註4）。また、堆積層を掘り込んでいる溝跡については、前述した理由により10世紀以降のものと考えられ、さらに堆積層には中世以降の遺物をまったく含まないことから、およそ平安時代後半に位置づけられるものとみることができる。

西側平坦面において地山上で検出した遺構については、遺物の出土量が非常に少なく年代決定の資料に欠くが、ロクロ使用の土師器や赤焼き土器を出土している溝跡もあることから、およそ平安時代のものと考えておきたい。

B地区検出の遺構からは、ロクロ使用の土師器や須恵器等が出土しており、中世以降の遺物はない。また、C地区検出の竪穴住居跡と土坑の出土遺物には、ロクロ使用の土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器がある。これらの特徴から遺構は平安時代後半に位置づけられると思われるが、一部の調査のため詳細は不明である。B地区とC地区については、次年度に実施する本調査の結果を待って細かな検討を行なうことにする。

（註）

註1　加藤孝他「多賀城町高崎古代井戸跡調査概報」（1967）

註2　多賀城市教育委員会、「山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書第2集』（1981）

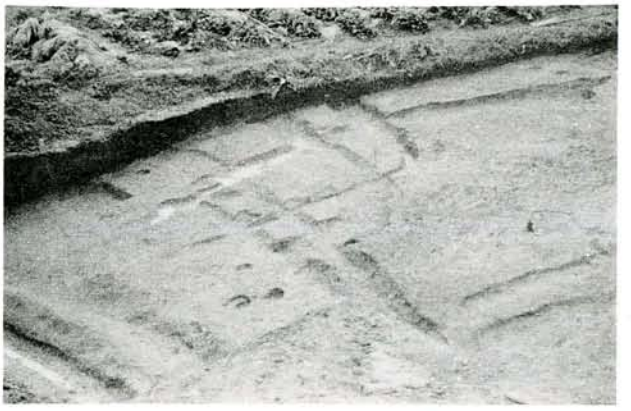
註3　多賀城市、「多賀城市史．第5巻：歴史資料2．第2章考古資料」

註4　宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡・政庁跡本文編」（1982）によれば須恵系土器は10世紀以降に出現すると考えられている。本報告書で赤焼き土器としたものは、細部で若干の違いはあるが、この須恵系土器と同様のものとみている。

図版１　調査区遠景(南東より)

図版２　Ａ地区ＳＤ02・10溝跡(南より)

図版３　Ａ地区ＳＤ02・10溝跡(北東より)



図版４　Ａ地区ＳＤ03･05～08溝跡(北東より)

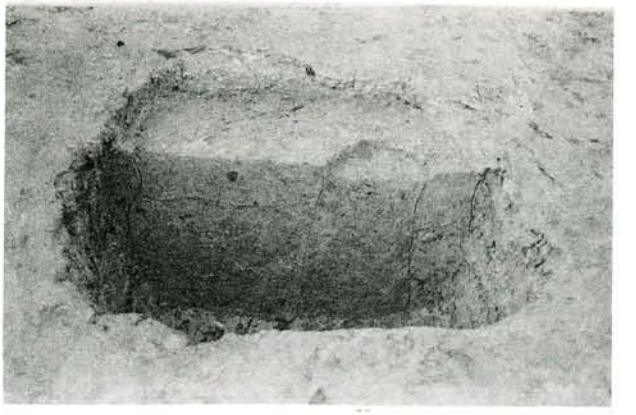
図版５　Ａ地区 ＳＩ01･ＳＢ01･ＳＡ01(東より)

図版６　Ａ地区 ＳＩ01･ＳＢ01･ＳＡ01(南西より)

図版７　Ａ地区 ＳＩ01竪穴住居跡(東より)

図版８　Ａ地区 ＳＩ02竪穴住居跡(東より)

図版 9　A地区SK 06土坑(南より)

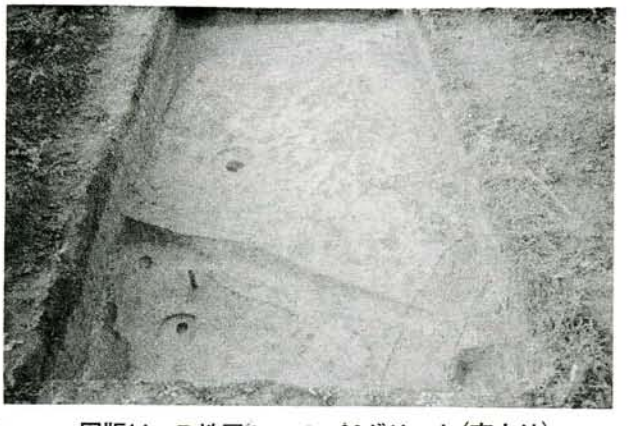


図版10　A地区SB 01建物跡柱穴半截状況

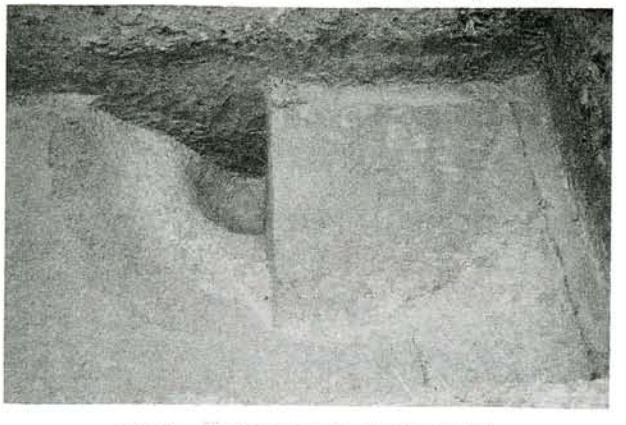
図版11　A地区SD 04溝跡(東より)

図版12　A地区SD 14溝跡、SK 03土坑(南より)

図版13　B地区Aq・Ar-40グリット(北より)



図版14　B地区Aq・Ar-36グリット(南より)



図版15　B地区SK 01土坑(西より)

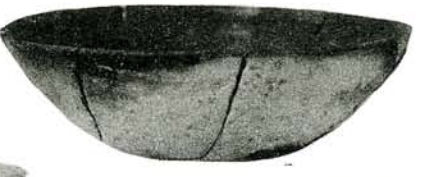
図版16　C地区S I 01・02検出状況(北より)

1．第16図 1

2．第16図 2

3．第16図 3

4．第12図 3

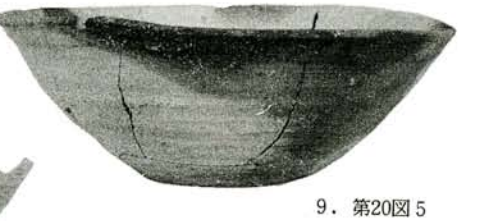


5．第12図 1

6．第12図 2

7．第12図10

8．第15図 1



9．第20図 5

10．第12図 8

12．第20図 3

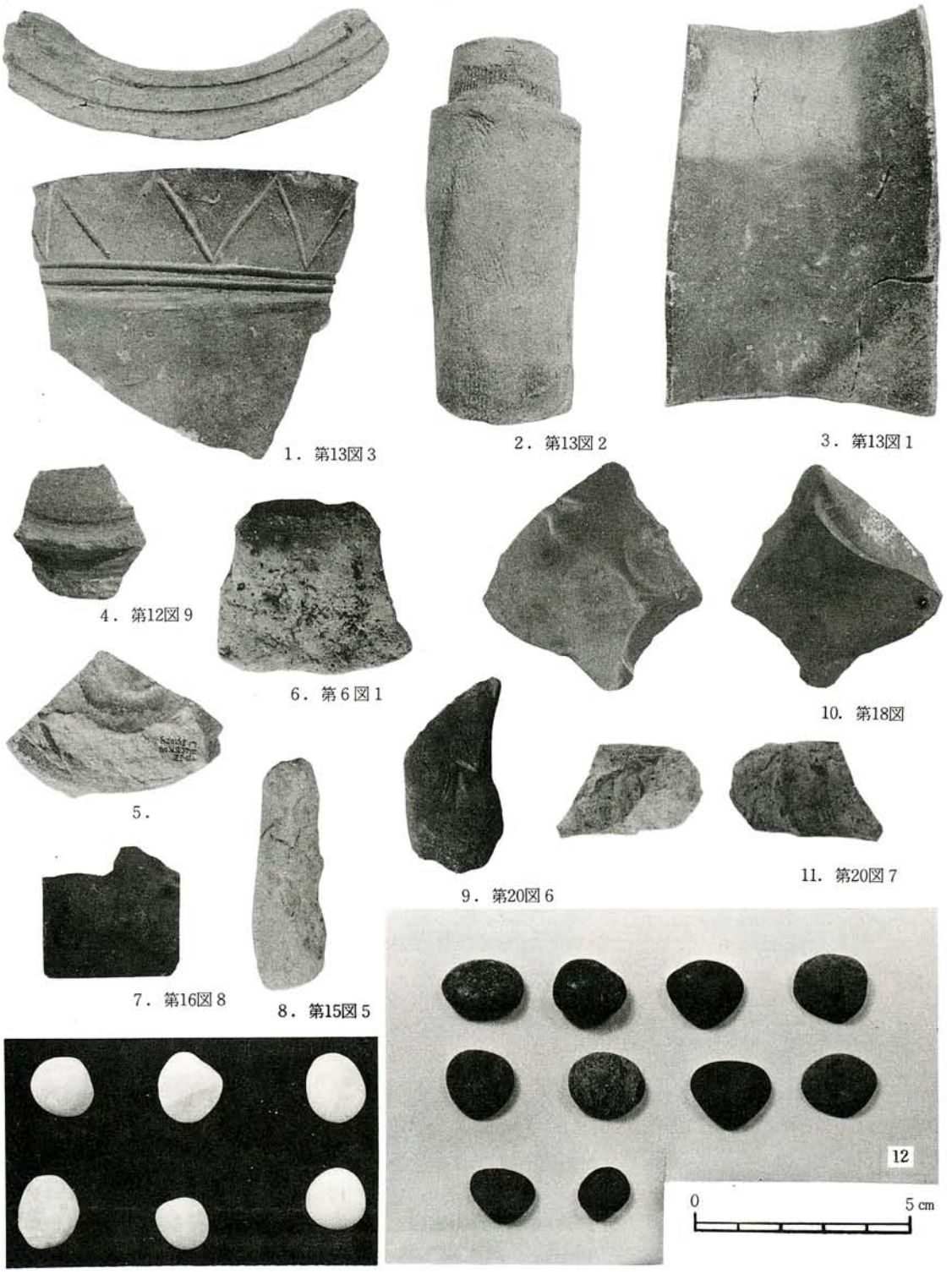
14．第20図 4

11．第15図 2

13．第16図 7

1.	土師器	杯	8.	須恵器	杯
2.	〃	〃	9.	赤焼き土器	鉢
3.	〃	〃	10.	土師器	甕
4.	〃	〃	11.	〃	〃
5.	〃	〃	12.	須恵器	壺
6.	〃	〃	13.	〃	〃
7.	赤焼き土器	〃	14.	〃	〃

図版17　出土遺物



1．軒　平　瓦　　4．円　面　硯　　7．　　硯　　10．二次加工ある剝片
2．丸　　瓦　　5．施釉陶器華瓶　　8．砥　　石　　11．　　〃
3．平　　瓦　　6．土 製 支 脚　　9．　　〃　　12．「円形の小石」

図版18　出土遺物

多賀城市文化財調査報告書刊行目録

第１集　館前遺跡―昭和54年度発掘調査報告―（昭和55年３月）

第２集　山王・高崎遺跡発掘調査概報（昭和56年３月）

第３集　高崎・市川橋遺跡調査報告書―昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年３月）

第４集　市川橋遺跡調査報告書―昭和57年発掘調査報告書―（昭和58年３月）

第５集　市川橋遺跡調査報告書―昭和58年発掘調査報告書―（昭和59年３月）

第６集　志引遺跡発掘調査報告書（昭和59年３月）

第７集　大代横穴古墳群発掘調査報告書（昭和60年３月）

第８集　市川橋遺跡―昭和59年度発掘調査報告書―（昭和60年３月）

第９集　山王遺跡―昭和60年度発掘調査報告書Ⅰ―（昭和61年３月）

第10集　山王遺跡―昭和60年度発掘調査報告書Ⅱ―（昭和61年３月）

第11集　高崎遺跡―都市計画街路高崎大代線外１線建設工事関連発掘調査報告書Ⅰ―（昭和61年３月）

多賀城市文化財調査報告書第11集

高　崎　遺　跡

―都市計画街路高崎大代線外１線
建設工事関連発掘調査報告書Ⅰ―

昭和61年３月31日発行

編集
発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目１番１号
TEL（02236）８－１１４１

印刷　有限会社　伊藤印刷所